翻刻・古賀侗庵『今斉諧』（乾）

高橋明彦

以前「昌平黌の怪談仲間――古賀侗庵『今斉諧』の人々」と題して、作者侗庵のことや『今斉諧』の諸本などについて概略を述べ、侗庵に奇談を提供した昌平黌の師友について考証したことがある（ぺりかん社『江戸文学』12号一九九四年）。しかし、その折には個々の奇談の面白さにも触れ得ず、またその本文を紹介する機会を逸し、こうして数年を過ごしてしまった。そこで今、時を得て『今斉諧』の本文を紹介したいと思う。

古賀侗庵撰『今斉諧（きんせいかい）』は正編五巻、続志一巻、補遺一巻の全七巻。写本で伝わる漢文体奇談集である。自序によれば、はじめ文化庚午七年に正編五巻・外編一巻が成り『斉諧志』と名付けたが、文化丙子十三年五月、二九才の時に再び補訂を加え、その折に『今斉諧』と称を改めた、という。そして、その後も書き続けたらしく補遺一巻が残る。またその内容については、不語怪力乱神の銘に対しては常套辞ながらも敢然と反論を記しつつ、あくまで文章修行のためという執筆態度を崩さない。しかし、本心はおそらく中国の志怪小説に擬して当代の奇談集を編もうとしたのであろう。

さて、本稿は分量の関係で乾坤二回に分け、全七巻中四巻までを紹介する。底本には、数本の伝本のうち最善本たる国立国会図書館蔵の侗庵自筆稿本を用いる。本文中には、朱による句点や訂正が見られるが、文化十三年の補訂の時点での侗庵自身による加筆と見る。ただし此本は、『続志』までで終る、補訂を以って完結したものであり、『補遺』を含まない。なお『補遺』を有するものに国立国会図書館蔵の別本がある。彼本は、自筆稿本の丁移りや行移りまでも再現した忠実な転写本であるが、その紹介は次号に譲る。また、これらとは別に転写された諸本がいくつか現存するが、ほぼみな巻四までで終るものであり、それらについても次号で記す。

書誌

国立国会図書館蔵『今斉諧』（請求番号：特三-八二七-三四）

体裁　写本、中本（一九・五×一二・八糎）

員数　正編五巻続志一巻全六巻三冊

表紙　原表紙、水浅黄色無地

外題　各冊左肩に自筆の打付書きで「今齊諧　一二（三四）」、「今齊諧五止／今齊諧續志　全」

前付　「書今齊諧前……丙子季夏之月、十又一日、侗庵蠖屈子書」、「自序……文化庚午季秋上澣、侗庵支離子撰」

内題　「今齊諧目録」（目）、「今斉諧續志」（首）

本文　「今齊諧巻之一（～五）」（首）、「今齊諧續志目録」（目）、「今斉諧續志」（首）

無辺無界、半葉九行毎行十九字、楷書白文。小字双行注あり。また後自筆で朱の句点を附し、ミセケチも少なからずある。侗庵按文は総て一字分字下げ、章題は二字分の字下げがある。

構成　前付、墨付一〇丁（書今齊諧前一丁、自序二丁、目録七丁）

巻一、墨付二三丁

［キーワード］漢文体奇談集　昌平黌

巻二、墨付二四丁、以上一冊目全五七丁
巻三、墨付二五丁
巻四、墨付二三丁、以上二冊目全四八丁
巻五、墨付二五丁
続志、墨付二二丁（目録一丁、本文二一丁）以上三冊目全四七丁
なお、丁付けの記載、および遊び紙なし。

印記　各冊一丁オに「帝国図書館蔵」（朱文方印）、「明治／44・12・2／購求」（朱文横長楕円印）

備考　底本が自筆たる所以は、『帝国図書館和漢図書書名目録』（三巻目二六六頁）などに「自筆稿本」と銘記されるほか、例えば『泣血録』（慶應義塾図書館蔵）など他の侗庵稿本に典型な楔のような文字と全く同じ手で書かれている事による。一見して別筆も混じっているように見える箇所もあろうが、それは筆勢が一定していないためであり、それらも宮内庁書陵部蔵の古賀本などからみな自筆であることの裏付けが可能であろう。古賀本のうち、侗庵自筆のものには、嫡子謹堂の手によって自筆を証する附箋が貼付せられるものが多く存するからである。

凡例

一、本稿は古賀侗庵撰『今斉諧』全七巻のうち、巻一～四の翻刻である。
一、底本は国立国会図書館蔵の侗庵自筆稿本（特二-八二七-二四）を採用した。補遺編一巻は次号の掲載分になるが、国立国会図書館蔵の別本（六-一三七-二三四）を底本とする予定でいる。
一、漢字は新字体・通行の字体に直した。ただし、常用漢字以外では正字を残したものもある。
一、底本には朱で記した句点がある。これはそのまま採用し、新たに附さない。また、読点句点の区別もしない。
一、小字傍注、字下げ、欠字や空白は底本の通りに再現した。ただし小字傍注のうち、明解な誤字訂正と見做しうるものは訂正されたものを採った。ミセケチも存するが、誤字訂正の埒内なので訂正されたものを採用した。
一、小字双行注は、＜＞で括り一行で記した。
一、底本のママであることを示すために、当該文字の脇に＊を置いた。
一、章題に、新たに（1-1）のごとく巻・章番号を記した。

謝辞

底本の閲覧・複写・翻刻許可をいただいた国立国会図書館に感謝申し上げます。

一九九九年一〇月二九日、国際日本文化研究センターでの共同研究会「日本における怪異・怪談の成立と変遷についての学際的研究」において、『今斉諧』について報告する機会を得た。高田衛氏、小松和彦氏、武田雅哉氏、土居浩氏をはじめ、ご参加の方々より多くの御教示に与った。お一人づつ名前を記せないのが残念であるが、あわせて感謝いたします。

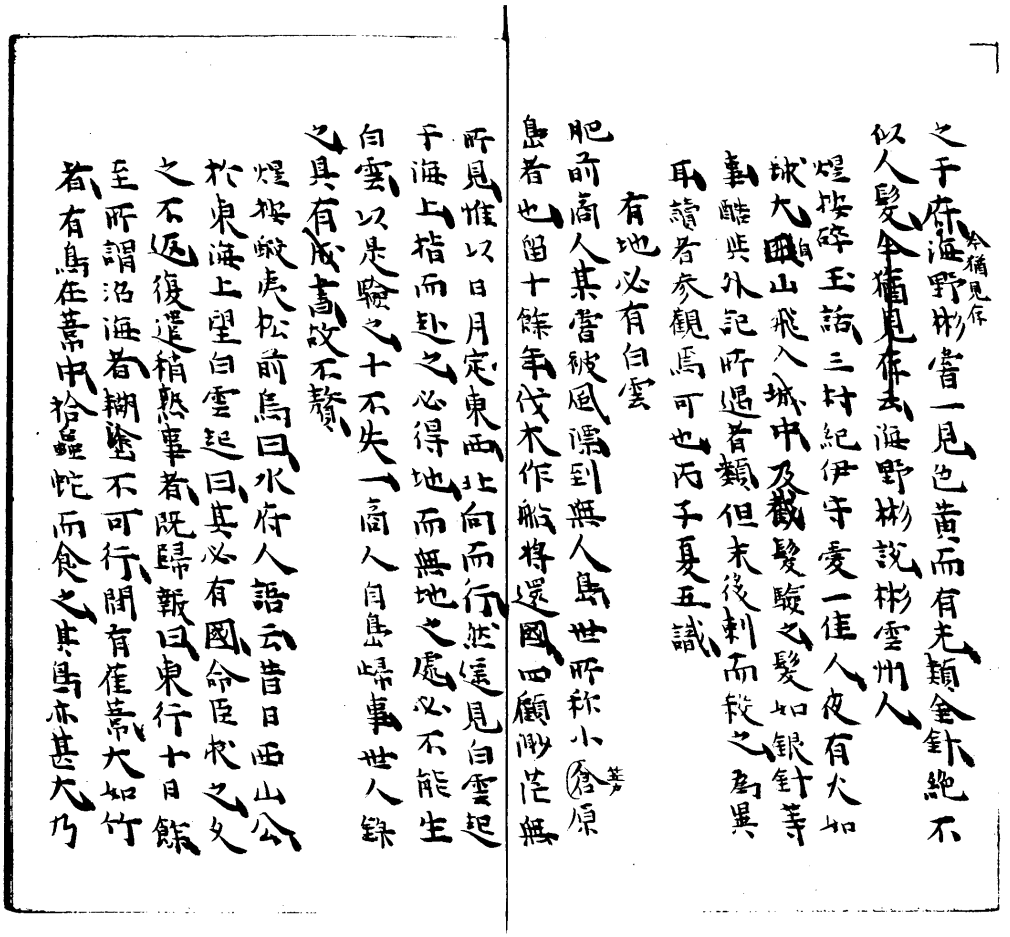

図1 『今斉諧』一冊目（巻一）12丁ウ、13丁オ

本文

書今斉諧前

予夙艸斉諧志、迄文化庚午、始脱稿、凡六巻、業已序而蔵弆之矣、今茲孟夏、経芸余暇、試出而閲之、紕繆顛倒、紛然刺目、便従頭読過、痛加刪正、凡五六日而竣功、先後次序、亦多所易置、又以書名陳腐、改曰今斉諧、省為五巻、已復録邇者所聞怪説奇事数十条、輯為一巻、題曰今斉諧続志、以附于後、夫予前日之輯斯書也、固自知其文之蕪陋、然未至若今之所見今而観之、醜態百出、使人（1オ）嘔噦、即今之所刪所録、自視以為不至於大拙、庸詎知五六七八年之後、不猶今日之於前日邪、夫如是、則予文才之浅短、誠可愧赧、而其寸進之験、則猶足以自喜且慰也、予庶幾吾学、吾徳、吾事功、日就而月将、駸々然遡乎盛大光明之域、固未肯以区々文章之進自画而止也、丙子季夏之月、十又一日、侗庵蠖屈子書、（1ウ）

自序

夫議論叙事、文分二途、而兼長者鮮矣、以班孟堅主之文、而議論少精采、以三蘇之才、而叙事稍遜焉、矧後之人乎、予少小好文、但恨才力浅短、文思甚渋、且平素所作、多仮説議論、至於叙事、則終年不一結撰、是以議論叙事倶拙、而叙事最拙、暇日試綴緝曩時所聞神怪説話、以学叙事、経三年、得若干則、已而一閲、庸陋瑣屑、雑然無法、意欲焚棄之、且以其精力所注、姑存之、分為五巻、名曰斉（2オ）諧志、外編一巻附、以蔵于筐底、一日、有友謂予曰、孔子不語怪力乱神、子亦学孔子者也、乃崇怪好異、書諸簡冊、以垂于後、何其背馳之甚也、予答之曰、唯々否々、見群龍无首、非怪乎、鳥雀同穴、非怪乎、高岸為谷、深谷為陵、非怪乎、夜恒星不見、非怪乎、鷹化為鳩、非怪乎、此皆炳載六籍、赫々人耳目、則聖人固已言之矣、然猶尚謂之不語者、蓋聖人長慮深思、恐其不足以為教、而或足以滋惑也、且今人之所謂怪、果指何物也、鬼之為祟歟、物之

（2ウ）為変歟、夫人強死則或能為厲、杜伯射王、伯有介而行、是也、殃咎将至、則物皆為変、豕人立而啼、鳥言譆々出々、是也、以逮天狗水虎之属、挙皆天地間常有之物、無足怪焉、語云、少所知、多所怪、世人蒙昧無知、覩天地常有之物、嘩然駭歎、以為至怪、自洞覧博識之士観之、其不為井蛙夏虫之嗤者幾希、令予成斯書、聊従流俗、題以志怪之名、庸詎知洞覧博識之士、不視之以為平常之談耶、況此姑借以学叙事之法、非終身誦之、予勿過詆（3オ）焉可也、友人笑而退、遂以為序、

文化庚午季秋上澣、侗庵支離子撰、（3ウ）

今斉諧目録

巻之一

山気作人　有地必有白雲
巨蛇不能出穴　巨蛇変形
雷獣一　二
戸自震動　鬼責不返金
奇鳥　姣童之鬼
鬼婦酬徳　金毘羅擁護土人
禿松之異　葵明神好動（4オ）
甕神霊応　甑島穴神
黏鳥之妙　狸一
二　三
四　八十嫗産子
怪兎　老狸逆知禍福
北表神祠怪石　楠樹為祟
善捕狐　白猿之怪
八幡林中之異　山中死亀
獺怪　妬婦生角（4ウ）
物変形成夫　太陰人
殺鱣之術　雷震一
二　三
聖像有霊

巻之二

大火前兆　牛淵之怪
巨蛇　蛇呑人
雷撃不孝子一　二
両頭蛇　勾欄失火之兆（5オ）
隆冬生筍　疫神
狂人見鬼　山鬼
熊殺群狼　周助之鬼
某氏之魂　男子生子
鉄釜自鳴　清正公威霊
狼一　二
三　四
姥湯石　与鬼囲碁
怪物　蒙古木像（5ウ）
橋断前兆　食蛇肉
妖婦人　巨蟒自死
手写法華経千部　猴猫腕愈瘧
鬼産児　愛須薬之原
四乳人　鬼謝恩
老嫗之怪　龍鱗
黒黛作祟　物化龍
女子夢舐磔死人　魂出遊
商家児報冤　龍掛（6オ）
二本松侯邸中怪

巻之三

清少納言之霊
二
久田氏之怪
狸窃胞衣
陰物生火
龍灯
其其之怪
画鬼婦人之怪
其二
加州山中之怪一
三
頼宮故地之怪
鬼責償金
伝道寺山之怪
原田氏之怪
海鼠
水虎
人丸像
嗜殺之報
桜殿之怪
古祠之怪
宇賀神
巻之四
熊谷之怪
天下嫗
火災有兆
鉄達磨入夢
人魚
水虎与人交一
龍涎香
怪物足三指
大島民産鬼
金谷門之怪
城墟之火
鼠怪（6ウ）
岩崎古城之怪
杜若和歌之異
二
白山之怪
孫山之異
鬼帰家
冤報
歩吏逢怪
蛇啼（7オ）
田間異虫
食筍有娘
海上之鬼
猿鮓
颶風
瑞龍院之怪
傘夫之鬼（7ウ）
婦人為神所役
一目人
味噌倉坊之怪
中村氏妾之鬼
窖中之毒
木像言
横槌
鬼婦
溺人之鬼
鼉
蛇好穴
蝦蟆吸気
鬼婦齧人
天火
韓児還冤
竹島鰒芦異常
巻之五
猫一
三
五
七
九
十一
十三
二
四
六
八
十
二
四
井中之毒
吉成氏之怪
吾嬬山大人
冤鬼作雨
冤鬼為祟
長府風土三則（8オ）
室中生花
鬼粟
海龍
八月之怪
龍
猫王
二（8ウ）
四
六
八
十
十二
天狗一
三
五
七（9オ）
九
狐一
三
五

六　七
八　九
十　十一
十二　十三
十四　十五（9オ）
猫〈補遺〉　狐〈補遺〉
二　三
四　猫〈補遺〉
狐〈補遺〉（10オ）（10ウ）

今斉諧巻之一

侗庵　支離子　撰

山気作人（1-1）

松江侯臣小池外記、従獣入山、聞深谷中有女子哭声、甚怪之、捫蘿挽藤而下、見一女子姿色姝麗、伏地哭甚哀、詰其故、女子曰、妾母継母也、遇妾無道、誘而至此、棄而去、欲帰無家、欲逃無路、不食已三日矣、外記曰、吾将告汝家而帰之、如何、女子曰、継母憎妾甚、継母在、妾帰終不免乎死、与其見甘（11オ）心于継母、寧餓死於此、外記、惻然哀之曰、然則能与我相従而帰吾家乎、女子曰、苟得以鄙陋之質託君子、固所願也、遂携以帰、寵之専房、不復及究其為誰氏女也、已而里中喧伝小池氏家、夜々有鬼火出、外記友亦見之、乃窃告外記、且詰其所由、外記曰、吾亦心疑之、一夕外記謂女子曰、吾今夕与友人約、会于某所、非明日不得帰、汝慎為我看守門戸、已出門、復踰墻而入、潜処于中庭、頃之窓壁爛然、有火如一団毬、直飛向前山、前山即外記（11ウ）遇女子之地也、少選火復自山遷家、外記候其将入窓、以刀撃之、驟聞挙室騒擾、外記急入内、婢言夫人中悪、女子向外記泣曰、事已至此、掩覆何益、妾非煙火中之人、乃山気凝結而成形者也、是以雖随君而来、日夕必一返山、不然則斯形壊散、不得而存矣、但三年之恩愛、海岳無量、不可無報、請留髻以為贈、苟髻在此、則妾魂魄亦永不離乎此、以能為君袪殃致福、便以剃刀断其髻、々忽堕地、而女子已不見矣、自是小池氏世宝其髻、後侯命蔵（12オ）之于府、今猶見存、海野彬嘗一見、色黄而有光、類金針、絶不似人髪、海野彬説、彬雲州人、

煜按砕玉話、三村紀伊守愛一佳人、夜有火如毬大、自山飛入城中、及截髪験之、髪如銀針等事、酷与外記所遇者類、但末後刺而殺之、為異耳、読者参観焉可也、丙子夏五識、

有地必有白雲（1-2）

肥前商人某嘗被風漂、到無人島、世所称小倉（笠カ）原島者也、留十余年、伐木作船、将還国、四顧渺茫無（12ウ）所見、惟以日月定東西、北向而行、然遥見白雲起于海上、指而赴之、必得地、而無地之処、必不能生白雲、以是験之、十不失一、商人自島帰事、世人録之、具有成書、故不贅、

煜按蝦夷松前鳥*曰、水府人語云、昔日西山公、於東海上望白雲起曰、其必有国、命臣求之、久之不返、復遣稍熟事者、既帰報曰、東行十日余、至所謂沼海者、糊塗不可行、間有萑葦、大如竹者、有鳥在葦中、拾虫蛇而食之、其鳥亦甚大、乃（13オ）取其葦径一尺許一茎而還、今蔵在水戸府中、拠此則白雲之下必有国、西山公固已知之矣、聡明之君、所見自不凡、丙子夏五識、

巨蛇不能出穴（1-3）

讃州丸亀観音寺山中、巖穴之間、一巨蛇居焉、有衆小蛇、出穴、口銜蝦蟆草実之属、返入穴、以飼巨蛇、蓋是蛇初尚小時入穴、久蔵穴中、身漸大、遂不得出、亦可以戒夫進而不能退、知得而不知喪者矣、加藤穀説、（13ウ）

越後有巌屋明神者、就巌穴祭巨蛇、以為神、日使童女薦粢盛、蛇初小而入、及長大、遂不得出、穴口方四尺許、而蛇不得出、其大可想、香坂維直説、〈丙子補〉

巨蛇変形（1-4）

忍城北門外池沼中有島、名宇和島、古来禁人、絶不得往島中漁釣、謂往

釣者必死、忍人石垣五郎左衛門者、剛暴有胆気、聞之、故往島中釣、有一小蛇来咬足指、五郎左衛門軽其纖小、任噬齧而不（14オ）禁、遂呑其二指、五郎左衛門急抜佩刀承蛇口、蛇猶呑而不止、五郎左衛門度其入深、挙刀抉蛇口、血四散灑地、岸上土石尽丹、頓失蛇所在、蓋巨蛇変而小其形、以図呑噬也、前田経説、

石州津和野一士人、与其友期釣于川上、士人先至、而友未至、方踞石吸煙、有一小蛇至、噛其足指、指大口小、口旁尽流血、有頃友至、士人笑示之曰、小虫何能為、請少待之、蛇遂呑指之半、而士人覚頭顱上痛不可忍、以手捫之、無物、（14ウ）疑其毒已周、至于頭上、遂打殺蛇、竟釣而帰、頭上痛尋愈、期年至前歳釣魚之候、頭上腹痛、全如前時、漸而焦痩、飲啖日減、方知前日蛇毒為患、召其子、丁寧告戒、謹勿効予前日恃区々客気、以我千金之躯、遂死、市川仲蔵説、〈内子補〉

雷獣一（1-5）

羽州米沢金華山、有薬師堂、一日雷震堂側、既而雲散雨霽、有一奇獣、彷徨屏営、如失路者、会山下民入山伐薪、避雷于此堂、見之、急趨与之搏、遂生（15オ）獲之、獣大不逾獺、赤黒毛、尖喙長尾、目光熒熒然、顔状綦醜、蓋所謂雷獣者也、遂鳴于官、吏悪其詭怪、命放之、香坂維直説、

二（1-6）

同州秋田民耕于田、会大雨迅雷、萆田畔積草間以避焉、少之雷止、有雷獣徘徊隴上、往殴之、殊綿弱、遂生獲以帰、今雷震之地、樹木屋壁必有擕攫之痕、地必有遺毛、蓋此獣為之也、噫此獣也、仮雷公之威、決裂破砕、惟其所欲、殊不知一旦（15ウ）失拠喪勢、俵々然於愚民之手、亦可以戒夫城狐社鼠之徒矣、小室弁蔵説、

戸自震動（1-7）

平山順対州人也、州人重忠小十郎家、在裏坊、順素識其人、嘗夜之其家、廳事後堂之際有一戸、順倚戸而坐、有頃、戸無故自震動有声、順大駭、問諸主人、主人云、此不足怪、某家屡有妖婦宵出白日見鬼之異、不止此也、便極力撃床、戸動自止、須臾如故、或云、重忠氏先人有妾冤死、因而為祟、或云、（16オ）昔日宅傍有国君離宮、前後皆山、中間地甚狭、故命人徒削平其山、山気尽鐘于此家、故有此怪、平山順説、

鬼責不返金（1-8）

奥州耶麻郡都沢村民弥七、嘗貸金於友人某、未遷納而友死、葬於郡中正福寺、一夕弥七遊正福寺、辞而出、于時春月朦朧、道途不甚分明、有一人翩然如影、来弥七傍、把其右臂撓折之、因倏不見、既而乃悟其為友人之鬼也、自後弥七毎対人、自（16ウ）羞其臂折、毎袖而不露、土屋朗説、

奇鳥（1-9）

戊寅春三月、都下大火、長者坊泉本氏亦焚、僅余一倉、未有所憩止、挙家居倉中、一夕泉本誠一出于外、仰空見一奇鳥、大丈許、掠雲而過、毛羽金色、照耀人目、隣里亦有観者、不知其何鳥也、按南方属火、又為朱鳥、蓋火妖也、泉本誠一説、

姣童之鬼（1-10）

羽州由利郡龍門寺主僧、嘗以事詣同郡松崎、投（17オ）逆旅主人、館之于別堂、堂在園中、主僧就枕未寝、夜半有童子、姿貌姣麗、由外叅戸而入、残灯熒々、面目可識、主僧寂然不動、窺其所為、童子直趨枕畔、主僧欻起急以衾覆之、身乗其上、極力圧之、既已失所在、急呼主人告之、且詰其故、主人曰、固宜然也、此地古名大斧之浜、浪華及諸州賈舶之所帰湊、土人有猾賊者、家留商人而宿、夜間窃以斧鉞莖刀之属断斬其人、財貨衣物、攘為己有、浜之得名、蓋以此、商人不知其故、相継而至、踏覆轍者（17ウ）無数、且当時舟中、必貯一姣童、謂風濤傾危之際、擠之海而献海若、以乞拯済、而姣童亦多偕商人死于非命、故其鬼猶現于今也、主僧始釈然、渡辺武緒説、〈下同〉

鬼婦酬徳（1-11）

羽州亀田有士人平戸左一郎者、嘗夜行、逢一婦人襁負其子而至、謂曰、妾有故不得不暫之他、須臾之間、煩君提抱此児、左一郎許諾而詩（ウク）之、既而以為此蓋世所称鬼婦者也、吾聞鬼婦所授之児、往（18オ）往転動棖触、以致傷害人、吾不可不防、便口銜小刀接児身、以抱之、蓋児少揺動、則

小刀已貫矣、有頃婦人至、謝其労、且曰、荷君恩徳、請有以報、君所甚願為何事、妾請為君致之、左一郎曰、某無他願、独恨綿力耳、婦人首肯而去、左一郎帰家、明旦早起盥嗽畢、手帕沾湿、因両手戻之、忽然中断、既而自訝曰、此豈故弊耶、更取其新者戻之、断若前、始悟前夕婦人之言不爽也、自是以勇力称、亀田侯嘗営一殿、命役徒般運木石、有一巨材、八人挽而（18ウ）不能行、左一郎両手提之而行、其力如此、

金毘羅擁護土人（1-12）

阿州徳島城下有地、名宮嶋、瀕巨海而居焉、時時颶風大作、漲波怒湧、直齧海坼、土人云頼金毘羅神擁護、得免于沈溺、海上有金毘羅祠、祠中蔵小木船無数、蓋国中舟人将有越海而行、必先造一小木船奉于金毘羅、以祈安穏、故累積而致多也、中有一船最古、相伝神亦最愛惜而好乗之、神之（19オ）擁護、無形象可髣髴、但大風洪波之後、試入祠中、輒見古船沾濡、水沫満中、似新自海上来者、四十宮淳行説、

禿松之異（1-13）

都下麻布郷道上、有一松樹名禿松、本森然竦茂、中燬於火、土人以其焼枯、命伐之、血自木中出、爾後風雨之夕、行人往往見有禿自樹根出、因以命名、竟莫解其来由也、前田経説、

葵明神好動（1-14）（19ウ）

阿州瀕海有地、名撫養有葵大明神祠、毎歳八月舁神輿出祠、横絶海波、行五丁所、安輿於海中洲上、待詰朝、復舁而還、納之于祠堂、初舁神輿入海、神輿奔馳自由、舁夫唯緊持神輿、身自然随行、蓋神性好転動遊敖、故其自洲上還也、直入祠堂、則神輿或卒然逆廻、舁夫委頓、必極力横奔岸上、然後神意始快、晏然入祠、或云、神龍身、四十宮淳行説、〈下同〉

甕神霊応（1-15）（20オ）

阿州撫養有御甕大明神祠、昔者土人得一甕于鳴門、委棄道上、其後天旱、試一叩之、則俄爾雲起、霊雨霈然、自是尊信者日衆、遂創堂宇以蔵甕、称御甕大明神、香火日盛、至今、値炎旱、一叩、則霊応如響、但一叩之後、怪風苦雨、卒然大至、或致損穀稼壊廬舎、故不妄叩焉、

甑島穴神（1-16）

薩州甑島、一名天堂山、在府治正西臣海中、島上有一穴、深黝不測、穴口衆草叢生、但七月中盂蘭（20ウ）盆以前、則草尽東偃、盂蘭盆以後、則草尽西偃、如有人蹂践者、土人云、穴中神出赴盂蘭盆会、石塚崔高説、

黏鳥之妙（1-17）

亀田侯臣国分逸平父和右衛門、善黏鳥、嘗以小黏竿黏鳥而獲之、即此一事、可知其巧妙、一日有雀止於屋極、和右衛門持黏竿黏之、未薄雀身、雀自堕地、和右衛門怪、近而視之、已不能動、因持而帰、又嘗有一鳥在木上、和右衛門以黏竿指之、鳥（21オ）復自堕、始知已極黏鳥之妙、然自是絶不黏鳥矣、蓋猫之巧捕鼠者、一睨鼠、則鼠怖伏不能動揺、或自従梁上落、与此同一理也、渡辺武緒説、

狸一（1-18）

椎名維直、武州本庄人也、家故畜一老婢、婢殺有胆気、既而帰家、家在窮郷、其兄出仕他人家、婢独居家、一夕其兄自外呼婢、婢意以為今已中夜、兄決無猝還之理、必狐狸之属誑我也、寂然不応、次日之夕復来呼婢、婢審其声、知果非兄、明日批長竿（21ウ）以為槍、沃油而火炙之、鋒殊堅利、掛于室内以待、夜半果至、呼婢如初、婢度其方至戸外、執竹槍、従障間刺之、啼叫而走、明日有人獲一老狸于傍密林中、被傷而死、椎名維直説、

二（1-19）

高木元蔵、丸亀侯臣也、家屡有怪、但主人在則無甚異、苟主人不在、則変怪百出、或灯檠自行、或鐺釜自挙、如此者非一、蓋狸使然也、戸外有一大類鉢、石為之、数人推始動、一夕倒立在庭上、又家人（22オ）或得鮮魚肉、恐其為所窃、以大桶覆之、鎮以巨石、明旦起視、則石桶如故、中已空矣、又嘗遺書于地、其封緘形製、大類今人所為、家人拾而視之、上題不己天（フコテフ）不四字、蓋其主名也、開拆則渾然一白紙、竟不知其何解、加藤穀説、

按狐狸窃魚鳥之属、扃鎖如故、而能取在内者、比々皆是、予家塾嘗養

鶩五隻、昏夜毎棲之戸下、板塞其口、巨石圧其外、一夕為狐所窃食、明晨視之、板下有一小穴、劣可容五指、而中不余（22ウ）一鶩、不知奚術能致此也、

三（1-20）

尾州熱田、尾張貴臣渡辺半蔵食邑也、邑中一百姓家患狸、往往器物不待人提挈而自行、或煮腥物将熟、俄自飛揚、州人福田賢輔聞其如此、与火伴数人往其家、坐少頃、爨室火管乍自挙、沙盆槌随之、盤舞堂上、久之方止、半蔵好武有胆略、聞而大恐、多持兵器、従家僕十数輩以往、発天花板、去龍鬚席、幽奥隈隅、莫不遍捜、終無所獲、然怪亦自（23オ）是絶、福田賢輔説、〈下二条同〉

四（1-21）

濃州大宿村、有民小森彦三郎者、家鉅富、一婢有姿色、潜与村中少年通、少年屡来婢所、互相憐愛、思得以為匹偶、事竟不得諧、乃相謂曰、事既不諧、只合同死、村外有天王山、幽寂遠人、某日之夕、当倶縊乎此、婢曰、此夕君若突然来、恐為他人所覚、以至僨事、請君歌而過門、妾聞歌声即出、少年諾而去、届期、果有少年歌而過門者、婢遽出応、携手（23ウ）同行、上天王山、以一巨縄繋于松樹、垂為両条、少年与婢、各以其一縈頚、同時従高処飛下地、少年身軽懸垂空中、而婢身重随地、不死、顧視少年、変狸形而死、大驚、遽自解其頚縄、遅疑之際、有一少年至、即向者所与約死者也、聞婢叙顛末、亦大駭、遂停其死、各帰家、人皆笑狸之小黠大痴、

八十嫗産子（1-22）

尾州笠松之地、村中有老嫗、年八十許、寡居、又無（24オ）親子弟、隣近有一少年、与女子期于老嫗家、少年先至、而女子爽約不来、少年不勝其欲、遂与老嫗交、既而老嫗産一男子、遂鳴官、事既醜怪、又足以戒夫淫人矣、

怪兎（1-23）

享和年中、大洲人入山猟、得一兎、体有六足、四足出于下、二足出于上、又自具牝牡、蓋両兎合而成一也、後藤弾次説、

老狸逆知禍福（1-24）（24ウ）

武州忍二城、相伝有老狸住焉、国君将有婚誕諸慶事、輒欣然歌謳、将有死喪之変、輒念百万遍、胥聴其声、而不覩其形、前田経説、

北表神祠怪石（1-25）

予州大洲之野有祠、曰北表大明神、祠畔有一巨石、考之鏗然鳴、相伝禁不得考、考必遭禍、一日国中民三十人許、来謁祠、見之相謂曰、流俗之言、未必可信、何不試一考之、考之、俄爾黒雲四合、雷雨大至、民相与入祠堂而避、雷震于祠上、在祠堂中者（25オ）大半被傷、幸而得無一死者、雨霽、各散帰家、経数日、被傷者瘡口腐爛、臭不可忍、豺狼嗅其臭、多自山中出、欲啖噬其人、傷者皆大懼、閉門不出、久之得癒、後藤弾次説、〈下同〉

楠樹為祟（1-26）

予州新谷矢落河之稲田橋、嘗圮壊、有稲田清左衛門者、家于河上、世掌修営此橋、迺多発人徒、入山伐明神祠中楠樹、々極大、挈之七八囲、既伐、血自樹根迸出、遂以充造橋之材、爾後、清左衛門児（25ウ）寝、至夜半、輒啼泣呼号、衆謂楠樹為祟、急迎解魔法師禳災、法師来清左衛門家、将修法、即見有物全白如尺断練、直至法師前、法師怖伏、不能有為、疾走還家、清左衛門益懼、具礼祭楠樹根、然後得止、

〈復出可刪〉善捕狐（1-27）

下総神敷之民有五郎者、淫蕩無行、独捕狐極其妙、州中小金原多狐、五郎之将捕之也、携挺長六七尺者、及一網与魚肉以往、先提所携魚肉、周行（26オ）原中訖、委肉于地、佯寝其傍以待、須臾狐来窃食其食、五郎便突起、以網掩之、挺打之、往々有獲、嘗網一老狐、々大窘、騰躍欲出、火自口中出、亦終被打殺、新井駿説、〈駿後改名延錫〉

白猿之怪（1-28）

羽州米沢高峰之地、有貞任宗任故城址、一日有猟夫経此、見樹下安一金椀在地、大怪、趨就視之、有蜜満中、試染指嘗之、審其為蜜、遂傾尽之、

急草于樹以窺、少之有一小猿来、見椀已空、左右顧眄、如（26ウ）惶遽疑惑者、又少一大白猿至、小猿侍坐唯謹、如対尊客、白猿両手挙椀、将嘗蜜、見空器、怒睨小猿、小猿畏怖、頭搶地、白猿遂執小猿支解之、猟夫見之、不勝其憤、便挙所持銃、以十銭鉛子撃之、正中白猿、白猿斃、即見衆猿狙自傍巌洞樹木間出、放迸四散、猟夫遂持其金椀以帰、或謂此金椀、蓋昔時貞任宗任之所用、埋没地下、久而終随群猿之手也、

八幡林中之異（1-29）（27オ）

下総八幡八幡宮傍有一林、不甚森邃、自古相伝入者必死而不出、水戸黄門公、素不信妖邪、凡都下之地、称有怪物邪神不許人経渉者、皆親入観之、既而聞此林中有怪、親策馬馳入、久之方出、面色如土、語他人、慎勿復入、竟不知其何怪也、有人嘗欲以縄囲林度其広狭大小、終日行而不知其止極、亦異矣、

山中死亀（1-30）

初茂上徳内之経略蝦夷也、舟行達利意尓里嶋（リイジリ）（示）、見（27ウ）嶋上山巒秀出、上干雲日、大喜、以為此嶋居蝦夷極辺、山峯高峻乃爾、苟得一山、則唐狄山丹皆応在目前、因而覧地形、察海道、闢地之功、由此可成矣、裹糧将登、山下民堅止之曰、上此山者衆、往々触山霊之怒、以至禍殃、子必勿往、徳内奮曰、大丈夫何畏乎山霊、遂登、纔至山腰、陰霧大起、芒不弁咫尺、遂帰、明日天色清明、迺復登、達山腹、復以大霧、不得前而帰、又明日天色清朗、徳内大喜曰、今日必得酬吾志、迺復登、纔経山半、大霧如前、進而（28オ）不止、驟雨有回風至、臭不可忍、猶不肯退、見巌下有一大亀死、長丈許、已近、臭益甚、撲人鼻口、使人嘔噦欲吐、徳内竟返、蓋向者所謂触山霊之怒以致禍者、皆此死亀使然也、名村章説、

獺怪（1-31）

上州足利郡唯上村、毎月五日之夕有市、士女四集、近村民某亦来、未達市、有一小川、民揚衣渉川、見川中有一僧首出、其大若一斗盤、民素有力、因与之角、遂相牽曳上岸、搏撃移時、民竟投僧於田（28ウ）而走帰、村有売豆腐店、民不能達家、欲先憩于此、敲門、店人出讐、則民已気絶矣、飲以湯薬、久之得甦、問其故、具告所見、明日吏多差人、往視田中、果有蹂践之迹、便命運木石、遮断川前後、以捜怪物、獲一獺殺之、椎名維直説、

妬婦生角（1-32）

本所回向院開帳〈開帳雅語作啓龕〉、士女雲集、不知何人、舁一轎来、委置寺門中而去、寺僧怪之、抉開轎戸、中有一婦人、被刺而死、旁有一嚢、盛金数十両、婦人容色姝（29オ）麗、而額上両旁皮肉隆起如角、蓋此婦人或者妬忌大甚、積失婦道、額上肉角、亦陰慝所致、故其夫不得已而刺殺之、又悪露己姓字、故付許多金、此託此寺、使為其営弁葬事也、実明和年間事、新井嘉平説、

物変形成夫（1-33）

讃州丸亀士人百々太郎左衛門家多怪、往々一夜之中、悉移倉中財物、挙而陳之于庭、一夕、太郎左衛門自外至、其妻迎入于房、方叙情話、忽家僕来（29ウ）戸外、報主君帰家、妻大驚惶、以為君子業已在此、那得更自外来乎、然且不得已、出迎、果太郎左衛門也、其妻益駭、具道所見、太郎左衛門怒曰、予既在此、烏得室中更有一太郎左衛門乎、提刀而入、向之太郎左衛門已不見、殆非人也、加藤穀説、

太陰人（1-34）

予家嘗畜蒼頭曰兵吉、阿州徳島人、為予説曩者在国、道上嘗逢一順（巡カ）礼者、其勢浮腫極大、親説先時勢垂曳于地、慮其触土石而致傷、故有所往、必（30オ）籍以茵席、而後始能行、其後屡詣讃州金毘羅、以祈済救、幸得不待茵席而行、此皆金毘羅之霊助、故今順（巡カ）礼以播神恵於四方焉、然尚猶垂至踝矣、四十宮淳行亦嘗経一見、為余説、与兵吉言符、益可信、

殺鱣之術（1-35）

鱣魚大者能食人、然其口上齦突出于外、下齦退蔵于内、不甚便呑噬、故物必沈没波底、而後始得食、南海嶋人欲取鱣者、躍入于海、使身自腰以上出（30ウ）水、鱣見之必逐欲噬之、人故東西逃避、令其疲極、然後刺殺之、甚易也、上原鴻説、

雷震一（1-36）

凡雷震之家、験其屋上、則有孔財通弾丸、愈下而愈大、蓋其触激而勢倍猛、以致然也、嘗震豊前中津、正堕一士人家刀上、外面一無所損、而室中刃已流成水、（鎔為汁）

二（1-37）

雷性畏火、嘗震平戸侯邸中、後宮、々女一人有胆（31オ）気、以燭出照、見庭中有黒雲一団、勃々騰躍、知是雷也、急以燭就之、雷見燭影而逃走、東西窮追、卒失所在、福井建蔵説、

一日雷震松山侯邸中医某舎楼上、挙家驚惶之際、見有一火団滚々如毬、従楼上循梯而下、家人知其為雷火、急焼樓欄帚頭以払之、蓋世伝雷畏棕帚故也、即見雷如畏避者、復返向楼上、卒失所之、猪飼斗南説、〈丙子補〉

三（1-38）（31ウ）

一日雷震本坊薬店井中、店人趨出、以井蓋蓋之、雷火迸出、焦頭爛額、遂病爛壊而卒、

聖像有霊（1-39）

会津国学孔廟、以金造先聖像、有盗聞之、潜入廟、抱以出、官命逐捕、不獲、一日吏過老坊、見賈人家掲招牌、書曰古於志阿里、急馳入、捜求窃聖像者、獲諸其隣、遂伏誅、像埋在床下、併獲之、蓋国語謂麹曰古於志（濁）、謂有曰阿里、其謂孔子亦曰古於志（清）、賈人家、乃売麹舗也、故掲牌如此、吏目不弁之無、（32オ）且顓蒙不暁事、故疑其標聖像以待賈者、然即天下至愚之人、豈有掲聖像於招牌以自衒者、而盗亦終以是為吏所捕得、此豈偶然哉、可以見先聖之霊千古如一日、又可以見天網疎而不漏矣、土屋朗説、（32ウ）

附考

雷震一〈第二十一頁　刃鎔為汁〉

内侍李舜挙家曽為暴雷所震其堂之西堂雷火自窓間出赫然出家人以為堂室已焚皆出避之及雷止其舎宛然墻壁窓紙皆点有一木格其中雑貯諸器其漆器銀釦者銀悉鎔流在地漆器曽不焦灼有一宝刀極堅鋼就刀室中鎔為汁而室亦儼然〈夢渓筆譚〉

巨蛇不能出穴〈第三頁〉（33オ）

蛇遂化作人形曰昔我幼児曽入古塚爾来形体漸大求出不得狐兎狸狢等或時入塚方得食之今長在土中求死不得故求於使君爾問若然者当掘出之如何蛇云我逶迤已十余里若欲発掘城邑倶陥〈出広異記　太平広記引之〉（33ウ）

今斉諧巻之二　　佃庵　支離子　撰

大火前兆（2-1）

丙寅季春、城南失火、延焼数十万家、焚死者無数、父老喧伝、以為三十年来之大火、先時高輪酒肉店、一日有人来謂曰、有客三人将来昼餉、其亟具食、主人恐其或不給、故設五人饌以待、既而客至、一挙無遺、督促主人、更其食、主人大窘、急炊飯調羹、移時而始能供、客不懌、竟食而出、謂主人曰、后（34オ）某日当復来、慎勿如今日之供給不弁、主人曰、諾、逮期、主人迺炊斗米、積脊如邱以待、少選客至、復為果然、殊有喜色、将辞、謂主人曰、感君厚意、請有以報、数月中、不有大疫、必有大水、不有大水、必有大火、都下人民十当減二三、至爾時、当使君一家晏然無恙、此所以報也、言畢而出、主人疑其匪人、令人蹤跡之、至海畔、瞥然不見、後月余、火発芝街、芝街有高輪北、去店甚邇、而是日南風烈、故火皆北延、而店中高枕無患、（34ウ）

牛淵之怪（2-2）

田安門外牛淵、相伝以為昔日有一牛溺死、因而為祟、至今絶不通牛車、通必致僨敗、或云、歳必有一人溺死者、予向者家俎橋二年、以溺死告者果再、俎橋距牛淵咫尺、嘗親往巡覧、其地道途甚坦、堤防甚牢、有雖堆堕而不可溺者、而相継淪没、亦怪矣、一夕風雨甚猛、有士人持傘、沿牛淵而過、遭一婦人容色絶麗、逆謂曰、遠行逢雨甚苦、願分余傘以蔭妾、

語意殊懇切、士人惻然哀之、便伴而行、（35オ）未百歩、婦人倏不見、驟而空中有物、欲引奪其傘、士人極力持之、不能抗、身将随、便釈手、傘直入空中去、士人疾走得免、

巨蛇（2-3）

肥州深濠邑有一山、々中有一蛇、漸長大、初尚噉鼠或兎、後能呑狐狸、村人聞狐兎哀鳴、試往伺、輒見其為是蛇所縈繞、不得動揺、嗣後毎晨、蛇必東向昂首、以吸朝日之気、土人見而大懼、相与謀焚其山以逐之、一夕望山、有火飛従他山、自是不復見、（35ウ）田代冨五郎説、

蛇呑人（2-4）

薩州有士人兄弟、好射猟、一日相与携弓矢入山、山中有二道、岐而復合、兄由左、弟由右、兄先至、弟未至、遵弟所由路而覓之、又不見、心大惶急、遥見有巨蛇下渓、将飲水、其腹団々、知弟已為所呑、悲憤兼極、関弓射之、中其頸、蛇怒而睨巳、再射之、又中其面、蛇稍癒、兄遂抜刀、趨斬之、死、割其腹、弟尚活、携帰医治、数日能言、謂初逢蛇、相違数武、蛇吐毒（36オ）気煦我、自是昏然無知、其後良愈、而眉髪剥落、容貌殊可醜悪、或曰、蛇已呑人、一飲水、則其人消壊、不可活、上原鴻説、

雷撃不孝子一（2-5）

羽州高峯村有地、名御館、相沿謂昔者源将軍義家駐営之地、両山対峙、至今人掘山間土、往々得遺鏃、山下林木蓊鬱、樹数十囲者比々、土人相戒不伐其木、謂伐必遘禍、村中有無頼子、忘其名、母盲、事之不以道、性尤貪戾、見御館樹木人不敢採、（36ウ）大嗤之曰、義家千載枯骨、何能作禍福、吾将採以営大利、便斫斤斧以往、既至、択其木最大者先斧之、未断半、黒雲四合、雷電下撃、其人震死、既而人往尋覓、失所在、但拾得其折菌残骨於艸石間、村人伝相告語、以為不孝之罰、香坂維直説、

二（2-6）

都下有父子同行、中道雷雨大至、子懼、棄父先去、既而雷震死其子、父在後得免、

両頭蛇（2-7）（37オ）

予年友渡辺武緒、一日過神田門外、見群小児逐両頭蛇、々逃入石穴、不復出、武緒竟無患、孫叔敖曰、見両頭蛇者死、妄矣、〈後五六年、武緒病死、蓋偶然而然、非以見両頭蛇故也、群小児逐両頭蛇者、未聞有一人死、叔敖之言、其誕可見〉

煜按唐劉恂嶺表録異曰、両頭蛇、嶺外殊多此類、時有如小指大者、長尺余、復下鱗紅皆錦文、一頭有口眼、一頭似蛇而無口眼、云両頭倶能進退、謬也、昔孫叔敖見之不祥、乃殺而埋之、南人見之為常、其禍安在哉、

勾欄失火之兆（2-8）（37ウ）

文化丙寅冬十一月、堺坊吹矢坊両勾欄失火前一夕、有人望勾欄屋上、有数巨人、長数丈、四顧大呼曰、烈焔騰空、奚不亟救、以手揮天水缸、水点漾射、及諦視之、翩然不見、明日際夕、火発近地混堂、違勾欄裁数十弓、狂飆横扇、直延焼勾欄、時演戯未畢、士女観者狼狽走出、互相蹂躪、死傷者甚衆、

隆冬生筍（2-9）

一士人舎後有竹林、隆冬生筍無数、相与大喜、将煮而食之、詢諸老人解事者、老人曰、此不可食、必（38オ）有異也、蓋試掘地而験焉、便命僮奴掘地、鍤入尺余、有蛇蟠屈糾結、不知幾千万、大懼、急掩土、竟不敢食、

疫神（2-10）

奥州耶麻郡嘗大疫、死者相継、郡中山潟村民新助、出戸外析薪、俄爾遍体悪寒、頭岑々痛、自以為疫気染身、急入内、熾火於炉、炙背以発汗、適有一僧藍面可悪、突然来立于前、新助以為此必疫神、急取焦薪以擲之、正中其眉間、僧蒼皇出去、病亦（38ウ）尋愈、異日出里門、有僧立于門左、見新助至、即趨捽其胡、視之則前日所見也、大怒、極力相搏、遂投僧于地而踞其項、僧忽不見、顧身、右臂已折、不可復執伎、自是売麹以為業、州人土屋朗祖母親見新助嘗売文蛤、屡向人説其事、人不信、則露右臂以相示云、土屋朗説、

狂人見鬼（2-11）

有一官人忘其名氏、嘗訪同僚、詣門揚声、家僕出応、視之、則藍面睥目、形状猙獰、宛然鬼也、官人大(39オ)駭、将斬之、既自以為白日都市中、不宜見鬼、是吾心神爽乱以致然也、疾走還家、脱刀与家人、戒云、吾将狂、慎勿近我、因自閉於密室中、静坐沈思、半日如故、是日、同僚東隣主人、発狂、手刃家人、蓋人間有妖悪之気流行、触之則発狂也、池田権三郎説、

山鬼 (2-12)

奥州耶麻郡大原村有猟夫、従獣入山、至険絶幽邃之処、拾得婦人髢、大奇之、持帰、是夕甫寝、即聞(39ウ)枕辺有婦人声、不見其形、但言速反我髢、猟夫叱之、去、自是毎夜必至、猟夫固靳而弗予、終不復来、剛*後猟夫家日衰、而髢亦落里中三老家、至今猶存、或云、此蓋楚辞所謂山鬼者也、土屋朗説、

熊殺群狼 (2-13)

薩州徒卒奉命之東都、過日州深山、時天已曛黒、行歩甚苦、偶逢一狼撃殺之、少之三四狼至、又殺之、既而狼千百成群、唱吼四集、徒卒力竭計窮、見傍有一大松樹、騰身而上、於是狼前者薄樹、後者(40オ)容首其股間而拳之、累々相属、斬逼徒卒、々々逆斬之無数、前者死、後者継徒卒気力倶憊、将転高枝以避之、矯首、即見違顔咫尺、有隻巨眼爛々如雷、徒卒進退維谷、以刀刺之、驟見有一物、自樹巔飛下地、狼随而四散、徒卒在樹上、竟夕、天明而下、見狼死無数、肝脳塗地、蓋熊巣樹上、忿被刺、攫裂群狼以洩怒也、上原鴻説、

周助之鬼 (2-14)

羽州米沢人森下氏曰周助、居市中、有叔父居、(40ウ)亦相近、周助日往其家学書、其後周助病熱、日劇一日、叔父在家、見周助来、不通姓字、直入内、家人驚怪其病亟愈、追之入室、倏然不見、家人大駭、往周助家訪疾、周助已絶矣、予友香坂維直嘗親誨周助読書、為予説如此、

某氏之魂 (2-15)

米沢士人大野左源太妻某氏、久寝疾、隣有山若清蔵者、其妻夜適厠、排戸、見前市有火懸、彷徨去来、有不忍決絶之状、妻懼而倒、不能起、家人趨救(41オ)之、望見火光亦大驚、詰朝遣人訪某氏疾、果前夕卒、且曰、将死、丁寧遺言、以稚女属託良人及長子、久之始絶、考其時、政火光彷徨去来之時也、香坂維直説、

男子生子 (2-16)

都下品川邑、有男子生子、孕財五月許而産、父子倶死、文化丁卯年間事也、

煜按広見聞録曰、一梨園子弟腹漸果、時々転動、宛如懐孕、一日正演劇、腹痛甚、下一胞、中有(41ウ)肉、長三四寸、略似人其人以痛楚卒、則西土亦有此事、

鉄釜自鳴 (2-17)

予祖良忠君在時、嘗一日竈上鉄釜忽然自鳴、殷殷如雷、大母急以皺紗袱覆之、頃之声止、既而良忠君転顕職、或云、釜鳴声自外入内則其家吉、自内散外則其家凶、大母之覆以袱、蓋亦為使其声不散于外也、

鄭獬留家在雍丘舟中、赴殿試、罷在京、候唱名、(42オ)忽舟尾晨炊釜鳴、声甚厲、震動両岸、已而聞獬已状元及第矣、右見清波雑志、又聞祭酒林公将有陞擢之命、数日前釜自鳴、則釜鳴大抵属吉兆、

清正公威霊〈或曰清正公廟在肥後妙福寺〉(2-18)

肥後清正公故国、至今猶立廟以祀、廟中嘗患鼠、廟祝奉粢盛、鼠輒窃去、廟祝不勝其憤、詣清正公像前、大声言曰、公昔征韓、所攻者服、所当者摧、遂致鬼将軍之号、此天下所共聞知也、今雖既没、独(42ウ)不能制夫眇然之鼠邪、言畢而退、自是鼠患永絶、人皆云、公之威霊、死而不亡、名村章説、

狼一 (2-19)

羽州米沢山中有一村落、曰牛森、旁近石穴、狼以為居、千百為群、春夏之際、村人待其已孕字、乃携硬飯及魚肉、寘之穴口以賀、率以為常、狼亦感其徳、永不為患害、村人或有所出、天已昏黒、則狼必送達山口、還則迎而至其家、以防護非常、已至門、踟躕彷徨、有不忍決去之状、人謝

其労、投以少（43オ）飯肉、然後去、古人有云、虎狼仁、允矣、香坂維直説、〈下三条同〉

二（2-20）

米沢風土凛冽、隆冬積雪、往々三四尺以上、土人殺狼、毎以雪中、先往山中、掃雪、鑿一坑、相違十数武、更作一大坑、覆以竹木、以雪鋪其上、使与地平、両坑之間、復掃雪以便覿見、殺一犬、手持之、沿渓澗而行、令其血滴雪中為識、蓋狼好沿水行、且使其認血而来也、然後入坑中、以杙繫犬、令不可猝（43ウ）抜、身蓐*大坑以待、既而狼来、必携一狐、距坑数十歩而踞地、先使狐伺察坑畔地、狐循行数四、還踞狼側、若告無人者、狼迺始入坑中噉犬、狐視狼入坑、疾走而去、土人即放銃殺狼、蓋狼平日以威力奴使狐、狐不得已、為之耳目、然而狐性慧黠、及狼入坑、知其必被殺、故先逃以免、且恐狼或得脱、必将怒探察之不謹而反噬己也、土人謂狼甚畏火、苟嗅煙火之気、登即逃走、故臨欲殺狼、於火薬、尤深蔵而不泄云、（44オ）

三（2-21）

米沢人好抜狼牙、以寘于枕中、謂熟寝之後、若有盗至、牙必揺動奮躍以覚夢、其霊如此、

四（2-22）

狼食人及獣、月望以前、必余其首、月望以後、必余其足、不尽食也、香坂維直所識山寺合毛僧雲吉者、夜過山中、逢狼被啖、裁存其頭顱、問其日、正望日以前也、

姥湯石（2-23）（44ウ）

友人山田維則、信州上田人也、説上田山中有温泉、号姥湯、常噴薄沸涌、潫射乱点、聞人足音則寂然無声、故欲取姥湯石者、必禹歩屏気、至泉畔、急以扇若蓋承之、水点落扇蓋上、即化石、維則嘗以五六顆遺予友実松穀、予親取玩弄之、石極円細、而皓潔可愛、

与鬼囲碁（2-24）

井上因碩家世碁師、因碩碁今進七品、先時都下有一賈人善碁、与因碩友善、家亦相近、屢之因碩（45オ）家角技、迭有勝負、賈人嘗臥病、不堪孤寂、際晩強起之因碩家談、因囲碁、五六局皆不勝、遂帰、又十余日莫夜、因碩居家無事、謂寂々不楽、賈人何不再来、少之果来、因碩問疾差劇、答以数日稍愈、又与囲碁、凡六七局、因碩皆輸、賈人去、明日因碩遣人之其家訪疾、則死已三日矣、前田経説、

怪物（2-25）

予祖良忠君、少時、嘗将君命抵浪華、市中有建牌以標怪物者、謂過客一覧、直若干銭、良忠君入観（45ウ）則人也、略具体而無口耳鼻目麻面藍色殊可悪問何以為食、曰、唯以水柔糊以啖之、試以糊半椀許、散布頭上、即見膚理鱗起而吸糊、瞬息乾尽、

蒙古木像（2-26）

後宇多天皇時、蒙古寇関西、対馬壱岐皆被蹂躙、対侯死於兵、州有一古寺、多列木像、蓋当時貯于蒙古舟中者、舟破而為州人所獲、以蔵于此也、像凡四五百許、挙皆顔状醜怪、始不似人類、国中婦人求子者、冒夜入寺中、抱其像而臥、輒有孕、故婦（46オ）人患無子者、間往焉、亦怪矣、対州人平山順説、

橋断前兆（2-27）

丁卯秋九月十九日、深川八幡大祭、士女紛集、忽然永代橋中断、陥水而死者且千人、信昭代之巨変也、初舁八幡神輿出宮、重不可挙、而汗津津自輿中滴、衆怪且懼、廟官等相与請祷、久之得出、俄而橋断、

食蛇肉（2-28）

米沢歩吏佐藤宅右衛門、嘗奉君命過木曽路、会（46ウ）日暮、投人家、主人出肉数臠啖客、且曰、此肉多食不利人、故且進少許、宅右衛門以其甘美、更求数臠、主人靳弗予、迺止、夜半家人悉寝、宅右衛門窃覘厨中、有肉堆積如丘、大喜、手攫食之、果腹而罷、及将暁、四支浮腫、遍体生瘡、大驚、呼主人、具告故、主人曰、此蛇肉也、性熱有毒、故不多進、今君不用某言、果然、便命家僮、促入浴堂、熾火、待湯涫沸使宅右衛門入、謂通体覚熱、而后可出、宅右衛門始入、冷如水、少之漸覚身熱、乃

出、瘡破悉出水而愈、(47オ) 香坂維直説、

妖婦人 (2-29)

秋山陽助、雲州浮浪人也、頗善剣法、客気張甚、以為天下無敵、来都下、居伝馬坊、一夕宅中有妖、視之宛然婦人也、抜刀撃之、中柱、刃入者数寸、頓失婦人所在、自是夜夜出、出則陽助以刀撃刺、柱楣障壁刀痕縦横、而妖出不已、陽助寝羸憊、且心懼、即亡帰国、他人来住其家、晏然無異、池田権三郎説、

巨蟒自死 (2-30) (47ウ)

戊辰九月、武州猪首弁天、有巨蟒自死、長三丈許、或云、為銃所中、或云、崖石崩而圧死、土人男女走往観之、時蟒身已腐爛、臭気撲人鼻、観者皆得疾、吏因作墻環之、禁人観云、

手写法華経千部 (2-31)

故小倉侯左京大夫、有妾某氏、侯薨後剃髪作尼、嘗之京師、居東山南禅寺、甲子歳、語寺主云、某夙有短願、将手写法華経一千部、以為先君修冥福、寺主固止之曰、此男子所難、矧婦人乎、且君作此 (48オ) 事、事畢必罹奇疾、不如已也、某氏曰、苟此事得遂、雖死無復恨、寺主曰、必不得已、則疾作之日、幸以書告我、我請得以法禳禍、某氏許諾、帰東都邸、親写法華経、至戊辰八月、凡閲歴三年余、而一千部告竣、便詣都開禅寺、追薦先公、以告其事、開禅寺蓋小倉侯世世帰依之寺也、是月下浣之夕、某氏夢有一僧来剃己頭、畢、以剃刀脊打項、僧忽入蓮花而没、詰朝夢覚、覚項微痛、以手摸之、生瘡、大如黍、既而漸大、如瓜、具以書報南禅寺主、至九月、瘡 (48ウ) 口破、膿如敗絮者、相継而出、累累不絶、某氏但言夙願已酬、死復何恨、池田権三郎親以職事省其疾、項肉腐落全尽、僅余咽喉、及顱骨、見之令人慄、時正迎牧野侯侍医診脈、医謂病大口(対カ)瘡、可治、但費月日耳、蓋此病之萌、在三年前、項中全腐、然後生瘡于外也、池田権三郎説、時九月廿七日也、十一月廿一日、権三郎至、問某氏、則曰、今病已脱然良愈、数日前能起行、

予甚不喜談仏氏奇験、然権三郎為人確実、未 (49オ) 嘗妄語、某氏写経、亦出於忠愛之心、故録之、若其夢僧剃頭畢入蓮花而没、則平素過信浮屠之故、伝所謂気焔以取之者也、

猳獨腕愈瘧 (2-32)

谷村与三兵衛、薩州士也、家蔵猳獨腕、能駆病魔、有病瘧者、以此禳逐、其愈如神、石塚崔高説如此、薩人上原鴻又為予説、国中一士嘗渡河、有猳獨、緊持其足、欲曳而没之、士急抜刀、断得其一腕、恐同一事也、(49ウ)

鬼産児 (2-33)

奥州耶麻郡猪苗代中坊賈人、巧製飴、有婦人抱児、手持一銭、夜来買飴、如此者六閲夕、賈人怪焉、試開篋撿所獲銭、則挙皆紙片木屑耳、大驚、次夕婦人復来、賈人遣人蹤跡之、至近寺墓上而没、詢諸人云、同郡堤坊某妻某氏死、新葬于此、便遣人之其家問之、果然、蓋孕十月、未能免身而死、葬僅七閲日耳、急相与如墓、発而視之、則児已生、啼声呱々、因携帰養之、数日亦死、土屋朗説、(50オ)

愛須薬之原 (2-34)

米沢老竹股兵庫家、世伝良薬、名曰愛須、視之純黒、類焼末者、以伝創瘢、莫不立愈、然其法秘而不伝、相伝、竹股氏之先、有夫人某氏、嘗如厠、有物以手撫其臀、某氏大懼、走出、自是上厠必遭此異、是以某氏毎出厠、略無人色、家人詰之、某氏羞赧不敢言、逼而問、迺具告所以、家人便択僕徒悍勇者五六人、伏於厠傍、令夫人如厠、相与急囲厠、見有物酷類小児、立于壙畔、蓋水虎也、逃走無路、遂縛 (50ウ) 執之、水虎啼泣、固請曰、某知罪矣、幸見解免、請不復敢貽害邑人、且授君家以良薬、因出薬以贈、具告製法、乃釈之、其所授薬、即愛須云、香坂維直説、

四乳人 (2-35)

白川老久徳与想左衛門、家世胸有四乳、其無四乳者、雖長嫡、往々遭疾病事故、不得為嗣、果有四乳、則雖次在叔季、終必承家、亦奇矣、大塚桂説如此、同州会津有一人、嘗仕久徳氏家、親見之、為土屋朗説、与大塚桂言符、可其不妄也、(51オ)

煜按、路史因提紀、辰放氏、是為皇次屈渠頭、四乳、宛委余編云、文

王四乳、宋范鎡百常父子我朝傀文僖謙、俱四乳、

鬼謝恩（2-36）

今亀田侯四代祖、岩城伊予守世子某、頗有失徳、因立孫為嗣、名孫女翁主為己女、嫁柳生備中守、翁主婉嫺有婦徳、最善撫下、下人莫不感恩懐徳、其在柳生氏、嘗一婢、既而婢嫁人、夫家綦貧、婢備嘗艱苦、翁主屢加賑恤、婢終病死、翁主又給其（51ウ）葬費、一夕有婦人来翁主宮、立于戸外、衆大懼、伏匿、一宮人頗有胆気、逆而問故、婦人答曰、某即前日奉事宮内者、蒙翁主渥恩、死靡以報、是以来謝、宮人謂具悉至意、応亟報翁主、但忽然現霊宮中、適致衆騒擾、後忽復爾、婦人拝謝而去、自是不復出、人称其以蔵獲之賤、尚能死而不忘恩也、渡辺武緒説、武緒亀田侯臣也、

老嫗之怪（2-37）

故友肥人医生横尾静安、幼時、嘗祭晩過八幡街、（52オ）見一老嫗、面大如箕、顔状獰悪、抬頭土墻上、睨行人、不見其身、土墻高八尺余、而嫗頭出其上、蓋長丈余也、静安見之頓絶、会傍人救而得甦、竟不知其何怪也、六七年前静安対予説此事、今静安上鬼録、已三年矣、偶思及此、泫然以記、時文化戊辰冬十月十五日、

龍鱗（2-38）

総州久留里民、浚川、獲鱗三枚、形状特異、所未嘗経覩、大各三寸余、蓋龍鱗云、以其事怪、遂聞於官、（52ウ）文化庚午年間事、松田順之説、

黒黿作祟（2-39）

黿之黒者、西肥佐賀方言、謂之呑方（ドンハウ）、城下有呑方閘、水旋渦而過、勢甚迅疾、時々溺人、詢其所以名、則曰、往日有歩吏数人、網魚于此、獲一黒黿、大尺許、便焚柴灸之、魚半体已焦、躍而入水、自是為祟云、家君門生医某、往網魚、亦溺死、嗚呼一魚之御冤尚爾、矧於人乎、

物化龍（2-40）（53オ）

佐賀士人岡本勘次、嘗鑿池于庭、引流水以注之、一日暴風甚雨、雷電大至、俄頃池水泛溢満庭、水波沸騰、勢甚烈、諦視之、有物在池中、奮迅騰躍、露其頭、不見其身、眼光射人、会勘次不在家、家人大懼、急旁告隣里、大驟人徒、剣戟挺杖、雑然交下、卒打殺之、雷雨倏然而霽、家君門人草場韡善画、嘗目撃其既死者、為之図、物長一尺五寸許、頭類猫、有双肉角、眼爛々可畏、豈将化龍、未成而見殺者歟、（53ウ）

女子夢舐磔死人（2-41）

佐賀有一重囚、法吏科決、徇于市、而後磔之、方其面縛而過長瀬坊也、商家一女子出観、注視久之、其夜将半、有人過坊、見一女子翩然従商家出去、以其以纎弱之躯冒夜独行、疑其有姦、尾而追之、女子前至是日行刑之地、騰身縁柱、以舌舐磔死人、良久方下、復趨故路、益怪之、潜伏路側、候其過、復尾之、女子直入商家、其人属耳于壁以聴伺、俄而室中女子夢魘而寝、召人索水嗽口曰、吾夢甚（54オ）悪、吾夢到今日行刑之地、以舌舐屍、穢不可忍、其人便入告之故、家人大驚、女子遂成篤疾、医治万方（百カ）無効、卒死、

魂出遊（2-42）

筑後三沼郡禅道寺主僧、有所之、夜帰、陰闇不弁咫歩、見前途有火、以為人行、大喜、疾行求及之、汗流胸喘而不能及、僧徐行、則火従而徐、疾行、則火従而疾、始覚其非人、火転入衢衢、僧復従之、火入一人家、僧屏気立乎戸外、即聞主人驚寝、謂婦曰、（54ウ）吾夢為僧所追、甚困、纔而獲免、僧入家、具語所見、方知火即主人之魂也、溝上是平説、

商家児報冤（2-43）

相州小田原人伊谷宇右衛門家、自古禁搗新正糕、且不得食、新正止食蕎麦湯餅之属、謂搗糕必化為血、又室中生男女、必有一人頭童無毛者、世世皆然、宇右衛門則二子俱無髪、上州高崎侯臣亦有伊谷氏、其先与宇右衛門同出、其禁搗糕、児有無髪者、皆同、問其故、則云、伊谷氏之先、嘗命家（55オ）人搗新正糕、有商人、携児来助之、児内手臼中、攫糕、欲噉之、主人大怒、投児於臼、併搗砕之、由是為祟云、

龍掛（2-44）

庚午秋八月廿九日、秋暑如爍、天色清明、無一点雲、日将晡、有黒雲、

驟起于西北、雨大至、猪飼斗南出城、至神田門、顧視東南、有黒雲下垂、黒雲中別有一種殊黒者、形類婦人帯、蜿蜒騰法、蓋雲纏龍（55ウ）身者也、是日海畔、往々有為龍所発屋者、

二本松侯邸中怪（2-45）

二本松侯邸、在山王祠北、邸中有僕徒舎、群僕同寝、夜中猝起歌謡抃舞、頃之復寝、明日問之、皆無所記、大抵十数年一有之、其後邸経延焼、無復是怪、

煜按陶南村輟耕録中、載沙魔事、与此類、（56オ）

附考

男子生子〈第八頁〉

正徳末蘇州男子孔万孕而生子邸報四伝靡不駭笑蘇人至今毎羞言之是知宋宣和間都城売青果男子誕子之事的不虚矣〈明胡侍墅談〉

両頭蛇〈第四頁〉

韶州多両頭蛇為蟻封以避水蟻封者蟻子聚土為台也蒼梧亦多両頭蛇長不過一二尺或云蚯蚓所化〈出嶺南異物志　太平広記引之〉（56ウ）

四乳人〈第十八頁〉

関安芸守入道万鉄者小松資盛之後也子孫当承家者必四乳万鉄孫女婿右兵衛尉之次子勝蔵亦四乳〈源君美退私録〉

蛇気生巨筍〈第五頁〉

聖祖南巡幸松江賜余山碑曰蘭笋山蓋余山産笋其味絶佳近有野人以一笋進太守較常笋大十倍太守問満園笋尽如是大乎野人曰大者止産一茎以其異也故敢献之太守曰然則是笋有（57オ）毒不可食即命于原産処掘池視之未及尺有大蛇蟠焉蓋冬月竹根得蛇気吹嘘力聚至是重以春暖発生故成巨笋野人惶恐謝罪太守尉而遣之曰汝効献芹意殊不悪然凡物反常者不可食類知是笋矣〈清垣赤道人吹影編〉

蛇呑人〈第三頁〉

天宝中有樵人入山酔臥為蛇所呑其人微醒怪身動揺開視不得方知為物所呑因以樵刀画腹得出之眩然迷悶久之方悟其人白爾半身皮脱如白風状〈出広異記　太平広記引之〉（57ウ）

今斉諧巻之三

清少納言之霊（3-1）

伺庵　支離子　撰

讃州金毘羅祠主僧金剛院、嘗欲移置仁王門于前十歩許、已命匠計費用、卜日創工矣、一夕匠人、夢有貴女子、殊美絶倫、被服都雅、翩然飛来、歌曰、奈幾安土能志留之登奈良波伊津万天毛、登和礼須奈加良安里天之毛可奈、匠人異之、連三夕同夢、遂語金剛院、頗解和歌、其師亦僧也、（1オ）在予州、金剛院乃袁輯近時所作和歌如于篇、以匠人所夢歌厠其中、遣人持往師家請雌黄、師読至匠人所夢歌、愕而言曰、独此一首、幽妙巧穏、迥然独勝、決非金剛院所能弁、又遣人持以遍示京師公卿長於歌者、僉云、此歌体裁格調、酷似清少納言、恐清少納言作、師以是言報金剛院、金剛院固已疑匠人所夢或是清少納言之霊、及聞是言、愈益神之、且清少納言渡海至四国、志有明文、而未覈其墳塋所在、今詳歌意、知仁王門前、即為清（1ウ）少納言所葬之地無疑、速停工、就其地創廟以祀、香火日盛、勝村豹説、

水虎与人交一（3-2）

豊後岡之地多水虎、往々与女子合、其合未始現形与交、唯女子睡夢中、屡如失精者、即為其所犯也、其与水虎交者、不得嫁人、嫁輒水虎必肆行残暴、以洩其憤、女子或無夫而孕、衆謂其与人姦而然、盈十月、産形類蝦蟆者数十、即水虎子也、若已産之後、両三年水虎不来与合、則嫁亦不為患、鈴（2オ）木白藤説、

二（3-3）

一賈人子、与水虎狎、水虎之来、人不見其形、但賈人子向坐隅、両手拠地、為交接之状而洩精、則水虎与之合也、久之来愈数、一日之中、交接或至五六行、家人痛戒勅、不聴、遂病髄竭而死、池田権三郎説、〈丙子補〉

龍涎香（3-4）

龍涎香出于南海島中、其始如沫者、聚合成団、而（2ウ）浮于水上、島人取而製香、甚佳、或云、如沫者、鯨魚交合所遺之精也、石塚崔高説、

煜按龍涎香説、見宋張世南游宦紀聞、甚詳、然以為真龍之涎、則予所不信也、海外雑記、則有二説、一曰、利未亜州有異獣、其所吐涎為龍、涎カ一曰、初土中生如脂者入海、凝而成塊、海魚食之、人割魚腹而取之、二説似皆未可様、独重修台湾府志曰、龍涎香、伝為鰍魚精液泡水面、凝為涎、今按鯨謂之海鰍、則府志之言、与崔高符、此説似（3オ）可従、

丙子夏五識、

久田氏之怪（3-5）

加州金沢貴臣久田儀兵衛家、多怪異、婢僕之属、無能留盈周歳者、嘗畜一僕、性頗恇怯、大求符章、帖之於己舎、柱壁皆満、已而語人曰、曩日有物、夜間窃入我舎、舐灯油、都尽、不但一再遭、今頼神符之滅、不敢復来、儀兵衛于役東都、夫人及長子居守、夫人好修容儀、不厳粧盛飾、不敢見人、一日被疾在床、命二婢携其幼息、暫往看楼騁望、以慰壱（3ウ）鬱、二婢便抱幼子以往、達看楼、見夫人已盛飾在此、大驚、逆問曰、夫人病已良差歟、何以能至此、再三請問、黙然不応、二婢怪且恐、使一婢先還視夫人疾、一婢在後者、不任惴慄、亦走帰、二婢入室、則夫人依然在床矣、益驚怪、且婦女之情、以向者所見酷肖夫人、不忍斥言其状、相与泣于夫人前、夫人怪問、不敢答、迺強起、親往看楼、一無所見、両婢始具告所見、夫人亦大駭、宅傍有一古井、環以竹墻、相伝禁人汲、或曰、怪皆自井中出、友田厚質説、（4オ）〈下同〉

怪物足三指（3-6）

佐藤八郎左衛門、金沢人也、嘗夜寝于室、夜半有物来、倚灯檠而立、将舐其油、八郎左衛門眼正覚、見而大駭睡、眼朦朧、不能晰其形状、但見其頭顱渾然如蒙褚、急起将斬之、物忽逃亡、提刀逐至庭上、已失矣、物自外来、破裱隔紙障凡五重、而紙障骨木、僅折其一、而得容、知其身不甚大、家僕又以燭大捜園庭、見地上有獣跡二、掌稍坦平、而有三指、（4ウ）

或曰猴獅三指、

狸窃胞衣（3-7）

丸亀人吉田幾、嘗経備後神辺之地、憩于一薬店、店人為幾説、店中嘗患狸、毎家人産児、写胞衣于器中、輒為其所窃、当時不知何物所為也、家本有一箆子、故暗不可用、以縄緊縛、懸在梁下、未嘗験視、箆子底有一小孔、家人嘗戯以物杜塞之、爾後庭中松樹、逢大風偃、圧壊屋壁、将葺治、因解箆子縄而下之、見其中有双狸、枕籍而死、旁盛胞衣（5オ）之器甚多、吉田幾説、

大島民産鬼（3-8）

薩州大島民家、嘗産一子、生而満身生毛、双目睥然、怒睨傍人、或以舌舐物、殆非人類、衆恐其貽後害、即打殺之、蓋山林之気感使然也、石塚崔高説、

陰物生火（3-9）

猫之純黒毛者、暗中以手逆摩其毛則火生、婦人頭髪、暗処櫛之、亦能生火、蓋猫与婦人倶陰物、故同生陰火也、予友山田維則、夜過水畔、有火光数（5ウ）点、飛走道上、及諦視之、獺也、然則獺又能生火也、

金谷門之怪（3-10）

加州金沢城門、有名金谷門者、門外地、門曠遠市里、諸士更遽守此門、一日士人笠間勘左衛門及同僚某、次当守此門、従蒼頭数人以往、至夕、遥聞有声類婦人啼、自市中出、沿塹而来、漸而近、少之声在門上、同僚某怖甚、勘左衛門曰、此或者婦人蒙譴、無所告訴、啼泣従門前過、而聴之如在門上也、奚足畏、又少之声至蒼頭舎前、一蒼頭年裁十（6オ）四五、驚叫趨勘左衛門所、勘左衛門大声疾呼曰、厳城之内、焉得有妖邪、即有焉、当擒縛之、何為退怯乃爾、言畢、寂然不聞啼声、啓戸求之、無所見、是夕、士人山東久之助、過金谷門外、見一団火光宛転門上、謂門中失火、佇望久之、欲守門者知而撲滅、須臾火不見、謂其已熄、迺帰、卒無知其何怪、友田厚質説、

龍灯（3-11）

奥州白川城下有山、名関山、山上入夜生火、漸而（6ウ）大、山巓皆然、其出有定期、期之夕、城下人多往観者、号曰龍灯、竟無詳其為何物也、堀池金弥説、〈下同〉

城墟之火（3-12）

白川城外有一山、城墟也、未詳昔年誰所拠、山上夜中往々有火出、団団如毬者甚多、城下人屡見之、予友堀池金弥、白川人也、亦嘗親見、時天清月白、然其見大抵以無月之夕、

其其之怪（3-13）

会津侯第在和田倉門内、第中歩吏子舎、昔年嘗（7オ）患怪、名曰其其、未有見其形者、但衆歩吏夜寝、俄頃一人起而言曰、其其、已而衆群起嘩曰、其其其其、良久、方悟為怪所欺誑、乃止、蓋其其之為言、猶曰怪其已出云爾、後第延焼、怪始絶、樋口光大説、〈下五条同〉

鼠怪（3-14）

会津高橋伴右衛門家、毎将有死喪之事、必有鼠怪、一日伴右衛門弟右門、坐而与人語、鼠忽従袖出、驚惶之際、已失所在、明日右門与人習槍、槍中身、立死、又一日右門弟七郎病麩瘡、在床、有鼠従（7ウ）褥下突出、俄而不知所之、時堂上襖隔紙障之属、扃鎖甚固、無寸隙可入、出、家人皆怪、其夕七郎果死、

画鬼婦之怪（3-15）

会津安養寺、蔵画鬼婦一幅、相沿謂、昔日有解魔法師、善絵事、来此、目撃鬼婦而為是図、容姿衰羸、神情凄冷、観之使人慄慄、且曰、観必不宜其妻、士人赤羽太郎左衛門、嘗一見、有守屋新蔵者、素相暱、屡之其家飲、太郎左衛門疑其与妻姦、酒闌、持（8オ）臥杵撃其眉心、瞑眩而僵、又出削刀、磨厲之、食頃新蔵甦、太郎左衛門詈曰、汝私我妻、我将以此抉汝眼、家人趨救、始解、二人遂被流竄、妻亦剃髪為尼、配遠地、

岩崎古城之怪（3-16）

会津向羽黒岩崎之地、有葦名盛氏古城墟、山崖斬然、臨水壁立、山中有一怪物、宛然人形、帯以下不可見、毎乗雲而行、名曰尻断行人、但不恒見、見者必有殃厄、士人横田千次郎、嘗与諸友経此地、（8ウ）見尻断行人飄々従川上過、時方莫夜、黯不弁物、而行人面目状貌、殊分明、問傍人、皆不見、千次郎曰、世謂見之者必有殃、豈必然乎、後数年、千次郎上書言事、欲尽黜貴臣而奪其権、不聴、褫職為民、流於実川、

其二（3-17）

士人福田勝吉、嘗与友一人、未明猟於此地、無所獲、友先帰、勝吉後、有一僧、面目獰悪、逐勝吉、勝吉疾走下山得脱、其友遅勝吉至、止而未去、叩其故、（9オ）亦大駭、又有人過此地、不知何人、大声邪許、運巨石、従崖上投下、其人大懼、疾馳而去、其他怪異甚多、

杜若和歌之異（3-18）

会津大坊通之地、有樋口氏宅、宅中世々相伝、禁歌在原業平杜若和歌、歌輒遭殃、樋口某一日会客而飲、已酔、笑謂客曰、吾家禁歌業平杜若和歌、謂歌必有殃、未必信然、請偕諸君歌以侑酒、可乎、皆曰善、主人歌、客和之、時堂隅植一屏風、高六尺（9ウ）許、有一女奴、面目詭怪、抬頭屏上、謂曰、北堂謂君、勿唱此歌、言畢、失所在、衆怪之、某入問其母、則母未嘗言、衆皆懼、宴未畢、客家来報父母死者二、衆益懼、遽罷宴、未幾而某死、自他客、或身死、或家亡、無一免者、詢其来由則曰、蒲生氏郷之自江州徒封于会津也、其臣有成美（鳴海）甲斐守者、実従、甲斐守享禄四千石、其所居、即今樋口氏宅是也、初甲斐守自江来、一孿童、名花染、有殊色、甚嬖之、後得一解魔法師、善撃小鼓、命誨花染、花染頓臻其妙、（10オ）甲斐守益々嬖愛之、宅中築仮山、鑿池、多植杜若、日夕遊覧、傍無花染則不楽、既而家臣或謂花染与法師私、言浸淫聞于甲斐守、甲斐守怒譴花染、不服、甲斐守不信、花染曰、倘爾不信、則某請得手刃法師以明赤心、甲斐守許之、其夕花染携酒、就法師飲、法師素風懐花染、聞其至、大喜、迎入室、対飲極歓、法師已酔、花染益強酒、法師方唱業平杜若和歌、花染和之、候其大酔、抜佩刀刺之、殊而起、花染出走、法師逐之、至観音堂、花染挙柱登屋極以（10ウ）避、法師創重将死、瞋目数花染曰、汝以弟子殺師、無義無道、我死必訴汝于天、言既而絶、花染下断其

頭、携以報甲斐守、甲斐守始釈然、次夕花染嘔血而死、自是為祟云、今樋口氏、自某死已三世矣、宅中猶多怪異、竈上亮窓不得糊紙、糊輒為所剥去、又前日有一厠、人不得往、謂往必見怪、今則不然、

〈煜按老媼茶話所載与光大所説極多異同不可一一改正今姑仍而不改〉

此事甚古、且聞其詳載老媼茶話、顧其事大怪可伝、故不忍刪去、老媼茶話会津人所撰、録怪（11オ）甚悉、恨未得一見、丙子夏五、蠖屈子識、

加州山中之怪（3-19）

加州金沢士人篠原庄兵衛、資剛強、有胆気、膂力絶人、好猟、数入深山従獣、嘗経澗畔、有物自空中堕入水、庄兵衛聞水声、驚愕而顧、無所見、意猶未釈然、脱衣入水、大捜、獲一瓦棺、以石破砕之、既出山、日晩過郭門、遇葬送者、竟不暁其故、下村宗兵衛説、〈下同〉（11ウ）

二（3-20）

庄兵衛至山巒奥深之処、会空中有人喚庄兵衛名、庄兵衛嘗一応、欸然怪風甚雨大至、山谷震動、嗣後雖有呼喚者、不肯応、亦終無他異、

三（3-21）

庄兵衛嘗至深山、絶無人跡之処、過渓畔、渓中芦葦叢生甚密、芦葦之外、有声、如数十人対坐語笑者、大怪、欲趨赴之、阻于澗水、不得往、欲縦所携猟狗、又不可、便両手捧狗四足、極力投之、直達于芦芦外、彼亦投還之、再投之、投還如故、狗已疲憊、気（12オ）息奄々、庄兵衛大懼、疾走帰家、以薬飼狗、狗終不救、爾後絶不猟矣、

白山之怪（3-22）

距金沢城四里許、有山名白山、山上有祠、地多不若、屡患苦行人、金沢士人中村八兵衛、有膂力、嘗携一跟随、有所往、帰時曛黒、道出白山、遥見三士、着黒色短襖、連袂而来、八兵衛深疑怪、以為天已暮矣、安得有来謁祠者、已接近、三士故張両袖礙路、八兵衛左則彼亦左、八兵衛右則彼亦右、八兵（12ウ）衛不勝其憤、抜白与闘、撃傷二人倒地、一人逃、追斬之、顧謂其僕曰、予既殺三士、万無生理、与其死於司敗、不如自裁、将自刃、其僕固禁、乃止、帰家、明日復之白山求三人屍、遍山中而不獲、方悟其非人、林瑜説、

頼宮故地之怪（3-23）

丸亀泮宮之地、旧為士人居、宅中多怪、屡易主、有新庄武左衛門者、嘗住焉、武左衛門有胆力、一夕自外帰、門已鎖、命僕推之、不開、武左衛門怒曰、（13オ）予尚未帰、門焉敢鎖、極力推之、訇然開、有物来触頬、冷如鉄、武左衛門急以刀刺之、有声如疾雷、走向城、蓋城依山而築、故怪以為帰、又一夕庭中有赤子啼声、武左衛門命僕徒捜求、不知所在、武左衛門親循行庭中、覚在井底、挙所持長脚鑽、迹声刺之、引出則鑽頭已為物所嚙断、然啼声亦止、勝村豹説、

孫山之異（3-24）

薩州内山田村民孫右衛門、採薪樵為生、一日牽（13ウ）馬入山、際夕其馬独自帰家、又不負薪、家人大怪、達曙、孫右衛門不至、明日衆入山覓之、獲其所携木煙袋委在地上、又行里余、獲其所用鉄斧、又行数百歩、見其衣服懸在樹上、卒不能得孫右衛門、因号其山曰孫山、石塚崔高説、

鬼責償金（3-25）

距金沢城三里、地名宮之口、在一老媼、性甚纎嗇、嘗貸城下人某以一方金、不即返、媼屡促之、一日媼疾棘、語刺々如嘻囈、皆貸金一事、及絶気、家人（14オ）揚被視其手、則金已緊握在掌中、大驚、後往某家問故、則曰、某日媼来我家、督責償金、且曰、向者稍優容之、致至今不返、今日必取之、吾見其辞気甚厲、不得已、探嚢底、獲一方金而予之、媼直走帰、算其日、政媼死之日也、林瑜説、

鬼帰家（3-26）

戊辰夏、会津兵往戍哈喇土、道次松前、軍士上島河兵衛僕某、遊娼館、連日不還、又虐館人、北原帥命行軍法、某家在越後津川、是日、某忽自帰家、其（14ウ）妻大喜、速将湯来、為某洗足、且多陳酒饌、某曰、予将往上島氏家、汝第暫待、言畢而出、其妻疑怪、尋遣人之会津、詣上島氏家問故、則曰某未始来、経十数日、某被誅之報至矣、樋口平三（光大）説、

伝道寺山之怪（3-27）

金沢士人加藤八十助八島金蔵二人、倶有胆気、好遊深山、人不能至之地、必故往而後快、伝道寺山在州中、以山有伝道寺得名、往焉者多逢不若、二人嘗夜往、網魚于寺前渓水、有物不覩其形、相（15オ）距十歩許、喚二人名、逐之去、少選復来、二人屏気鉗口以待、即覚声在咫尺之内、将突前生捕之、既已逃逸、復在数十歩外喚名、了不知其為何物也、林瑜説、

冤報（3-28）

都下伊勢崎坊、有鐘巻一右衛門者、背上刮青為清姫化龍纏鐘状、故人以為綽号、凶狡無頼、家資蕩然、時信州坂木伝舎有女子、名染、奇醜無比、自度没身必不得匹偶、不如致富以快意、於是削衣（15ウ）減食、豊入嗇出、家道以饒、一右衛門聞之、軽装往其家挑之、女欣然承受、一右衛門謂吾年少無頼、資産蕩尽、今将翻然改行、買居舗以基産業、奈逋債猶多、力不能償、君苟見贍、則吾必速迎為婦、女喜而許之、空橐以予一右衛門、因与約、某日来迎、届期、一右衛門不来、染愁思都廃寝食、月余一右衛門友某来、宿于此、聞之笑曰、一右衛門方在軽井沢、狎妓、悉喪其資、今子眷恋乃爾、皮之不存、毛将安伝、染憤恚成疾、月余益阽危、叫呼而死、（16オ）将死、言曰、吾死必訴汝於天、未幾、一右衛門姦状発露、繋獄、告獄吏曰、苟脱某罪、某請捕罪悪倍某者三人、以贖罪、吏許之、一右衛門便捕山伏小八溝鼬喜八湯棺場買喜兵衛以献、湯棺場買者、蓋都下有死者、臨葬以湯沐棺、当時所用器物、凶穢不可他用、因賤買以罔利、故以為綽号、山伏溝鼬、未晰其義、三人被詰、罪状明白、即時伏法、臨死、皆罵曰、吾徒三人、皆由汝而死、死後必有以報汝、一右衛門出獄、革面、陽為善、買宅于深川仙台堀西（16ウ）平野坊、事生産、又聘妻、隣仵不知其為凶人、踰年、妻産一女、又数年生一男、名一之丞、一夕女睡語曰、吁可畏、啼叫而醒、次日夕、一之丞亦然、妻深怪之、一右衛門曰、此世所常有、不足怪、又次夕、女欷起、齧断一之丞吭而出亡、不知所之、一之丞即死、妻殊惋痛、発疾死、会初秋盂蘭盆之祭、一右衛門独処沈思、始悟冤報之故、瞿然有懼心、一夕、有人叩戸、一右衛門問其名、応云、喜八小八喜兵衛、一右衛門叱之、不去、徒戸隙入、殴一右衛門、一右衛（17オ）門不堪苦楚、呼号之声徹四隣、隣人明日詰之、答云、無之、自後夜々如此、隣人益怪、告地主、地主試宿其隣以験之、即聞一右衛門云、某勿困我、或云、婦人幸寛我、明日見一右衛門、道所聞、且曰、勿自秘掩匿以重罪、一右衛門不得已、具説前事、地主因勧一右衛門剃髪為僧、以為死者祈冥福、一右衛門従之、数夕寂然、至次夕、叫号倍前、地主慮有他変、命人看守、夜半一右衛門号曰、熱甚、以足抉戸突出、死于外、或曰、人見其乗火車而行、新井嘉平（17ウ）説、

原田氏之怪（3-29）

会津士人原田主馬家多怪異、門外嘗有客揚声、出聳則無人、屡有此異、莫知其何怪、土屋朗説、

歩吏逢怪（3-30）

金沢城下有神明祠、九月十五為祭日也、士女紛沓、家々作酒食、以招賓客、是日、金沢歩吏、正祇役在江戸第、忽萌帰郷之念、倚柱独歎、適有一人自外来、謂曰、子欲帰郷乎、曰然、其人曰、請携手同帰、（18オ）歩歩吏褰衣従之、瞬息之際、身在神明祠前豺川橋上、与独歎時正同時、不愆少刻、迄不知其誰所送致、下村宗兵衛説、

海鼠（3-31）

讃州高見山民、一日網于海、将挙之、網重甚、民大喜、以為此必海魚成群者、一網打尽也、網纔離水有鼠無数、咬断網絲而出去、加藤穀説、

蛇啼（3-32）

下総葛西下岩村民新三郎、嘗過田畔、見一巨蛇（18ウ）長丈余、便挙所持挺、極力打之、蛇啼叫一声、遂死、新三郎棄而去、道上遇蛇無数、尽赴向者巨蛇所死之地、新三郎大恐、疾走帰家、明日往覓、已失死蛇所在、渡辺武緒説、〈下同〉

米沢山中有一大木、一日無故自焚、木中有啼叫声、鳴々不止、久之火熸、人往視之、木科如臼、有巨蛇在其中、被焚而死、神保甲作説、

水虎（3-33）

新三郎嘗歩戸田川堤上、有一木板流、文理密緻、（19オ）其有光沢、新三郎

欲取之、而岸陡絶不可及、見傍有一竹林、謂伐竹為竿、可以釣得之、忙以所持斧斫竹、且斫且顧、惟恐木板流去、俄見木板頓生両目睥然、怒睨新三郎、新三郎大駭棄去、蓋水虎之属所化也、

田間異虫（3-34）

享和中夏夜、予在友朋一両輩、在北塾読書、環灯而坐、是夕天色陰黯、須臾暴風引雨、自東南至、有飛虫従之、不知其幾千万、入坐逐灯先、油盞幾満、（19ウ）明日遍詢諸人、都下皆然、虫状類蛾、甚纎小、尾岐成二、如燕尾然、蓋田間所生也、

人丸像（3-35）

播州明石有人丸祠、蔵人丸像、自古相伝、不許人入拝、謂入必致殃祟、小田原士人長野某、頗有胆気、故入視之、且以手摸像身、身温如生、某驚懼走出、無幾遂死、其子孫連六世早死、寿不得過四十、至七世孫某、年甫四十、至除夕、大会親姻、宣言曰、吾已保生至今日、可以保無患、果得達曙而不死、（20オ）則吾将尽罄家資、買肉如陵、酤酒如澠、以饗諸君、迨夜半、無疾猝死、日治球説、

食筍有娘（3-36）

長州長府有寺、忘其名、寺堂前有竹林、主僧時々向林而溲、已而生筍、甚鉅、僧異之、抜去棄于河、河上処女烹而食之、覚如有人道之感、無幾有娘、父母疑其与人通、究詰絶無姦状、女不得已、具陳所由、遂生一男、久之寺僧聞其食筍而生子、召児視之、面目状貌酷類僧、知其為己子也、便請以為雛（20ウ）僧、小田明説、

煜按今昔物語載食蔓菁而孕者、事極相類、

嗜殺之報（3-37）

丸亀曩時有老曰多賀内蔵之丞、性残忍嗜殺、屡乗夜斬行人、或以屍試刀、数日不見血、則怏々不楽、有士人岡田又兵衛者、残虐相類、毎与興行慘酷、一日聞某寺新葬人、夜与又兵衛往求新墓、不獲、失望而返、至寺門、有丐婦、抱子而臥、内蔵之丞呼令起、謂吾新造刀、将以試于人、汝勿去、丐婦度不（21オ）得脱、泣請曰、吾止一児、幸賜活児命、則死無所憾、二人聴之、遂斬丐婦為万段、而携将其児、還過塩屋橋、内蔵之丞又将斬其児、又兵衛止之、不可斬於橋上、嗣後二人俱病熱、痛苦不可忍、呼号死転而死、加藤穀説、

海上之鬼（3-38）

予聞諸海上老長年云、舟行海上、入夜、屡遭鬼乗舟而来、就舟中人借水杓、舟人必徹去其底以与之、鬼便汲海水以沃舟、不知其与底、謂舟必当沈、（21ウ）久之始去、蓋人淪没海中、冤結不散、故欲更溺人以自快忿、其意与虎倀亡同、　家君門生蒲地龍吉、在海上舟中、夜聞衆揺櫓譟而過、撥蓬視之、無所見、知其溺人之鬼也、

煜按宋郭彖睽車志曰、四明人鄭邦傑、以泛海貿遷為業、往来高麗日本、一夕舟行、聞鐃鼓声自遠而至、既而漸近、則見一舟甚長、旌旗閃爍、両舷坐数十百人、嘯呼鼓棹疾進、漸近、若長人舟、径没水、半里所復出、鼓棹如前、舟師云、此謂（22オ）鬼划船、蓋前後溺死者所為、見之者不利、邦傑乃還、以事相類、故録之、

桜殿之怪（3-39）

雲州有吐月山、山多桜樹、有御殿迹花壇等地名、尼子之方盛也、嘗築離宮于山上、有桜殿者、以庭多桜樹名、殿嘗多怪、人不敢夜往、尼子義久有胆気、夜独坐殿上以待、俄而聞床下悉窣有声、見一老婆、頭髪頒白、扶二丫鬟以出、坐于堂隅、義久不為動、屏気以観其所為、老婆命丫鬟曰、今夕不図（22ウ）貴客枉顧、汝其往按摩腰股、丫鬟奉命、直趨義久許、義久挙扇極力打之、丫鬟顛踣走去、老婆又命一丫鬟如初、義久復以扇打之、走、老婆曰、汝等皆不中貴客意、吾其親往、乃徐々近義久、義久度其至膝前、急抜刀斬之、倏然不見、明日視席上、流血淋漓、跡血索之、血直入堂下、命人大捜堂下、無所獲、義久曰、此決不他適、更命掘地、入一丈許、得石碑三、蓋一則老婆碑、二則丫鬟碑、了不能知其為何人也、義久曰、此即為怪者也、命移立道傍、以時（23オ）祀之、其後碑地入松連守右衛門宅、守右衛門移家、又携碑以往、世々祭祀、祭祀稍懈、輒為祟、海野彬説、〈此事甚古、以其怪奇可伝、故録之〉

侗庵 支離子 撰

猿鮓（3-40）

羽州山中有猿、往々詣人宅乞飯、逐之、去復来、不得已与之、経数日、人周行渓谷中、崖石凹陥之処、有貯飯糅以木実者、取出噉之、甜美異常、名曰猿鮓、福井建蔵亦嘗一嘗、為予説若此、

古祠之怪（3-41）（23ウ）

雲州海上新屋井之地、為尼子毛利接戦之場、有古祠堂、多怪、人不敢夜往、松江士人根松権八有胆力、聞之故往焉、夜半、有人叩戸曰、吾野門三弥也、今夕見怪否、三弥者、権八親友也、権八不応、須臾復至、言如初、権八曰、無之、其人便排戸而入曰、吾即怪也、汝何曰無、権八視之、其頭極大、半出于梁上、権八不少慴畏、少之怪出去、権八帰見三弥、問前夕嘗至新屋井古祠否、三弥曰、否、権八性寡言不泄、三弥意其有故、屢問之、権八不得已、告之（24オ）故、且戒勿語、蓋恐喧伝衆口也、若権八可謂一身都是胆矣、権八後学禅、改名道芥、又改山心、海野彬説、

颶風（3-42）

庚午九月、蓮池人満野順説、数年前在蓮池、夏夜独坐読書、遥聞有声如怒濤飛瀑、已近則風也、其勢甚烈、発屋抜樹無数、然一吹而止、寂然無声、明日視之、則風所過、其跡歴々可認、横裁数十歩、破屋僵樹、皆在其中、絶不出乎外、或曰、此所謂颶風（24ウ）者也、

文化壬申冬、都下地大震、損壊屋宇無数、有死者、然細察之、則自北迤南、直径里許、横裁数十歩、崩壊為最甚、不当此道者、相距咫尺、而迥然不侔、知地震亦自有道也、〈丙子補〉

宇賀神（3-43）

回向院之祭也、有商人、携宇賀神来、観於人以罔利、神蓋死而脯者、人頭蠟身、有口鼻而無耳、頭髪赤色、肌膚枯燥黧黒、生少許毛、腹中空洞無物、惟（25オ）存躯殼、予友満野順等皆観、或云、此即山海経所謂燭陰者也、（25ウ）

今斉諧巻之四

熊谷之怪（4-1）

加州金沢歩吏某、屢以使事至江都第、一日過武州熊谷、猝如顛蹶者、四顧則山川道塗倏然変換、所未嘗覩記、心惶遽、疾行不止、経尽山路、得一茶店、歩吏渇甚、馳入、呼召老媼求飲、不応、連問如故、歩吏憤甚、以手打媼世、即時僵仆、挙家大驚、扶媼入内、歩吏復向一人求飲、不応、拳駆之、即仆地、歩（26オ）吏怪且恐、急出店、飢甚、見道傍一店多陳果物、大喜、持銭往買、店人嘿而不応、歩吏不得已、手攫食之、亦不禁呵、爾後苟逢酒肆茶肆、恣飲噉以充飢、都不費一銭、又道上逢人、手触輒倒、大楽之、所推倒者無算、行而不止、有一大城当路、城門不鎖、歩吏試闖門、門有守吏、未始誰何、便入城、任意横行、俄而有解魔法師数百人、各手一稾席与縄、以追歩吏、歩吏始自悔、向者屢行凶暴、故今被捕治、東西逃避、法師四面麕至、遂為所囲繞、歩吏叫号求（26ウ）哀、法師不応、以席纏歩吏身、而縄縛之挙投于河、俄頃如夢驚覚者、身仍在熊谷坡上、大駭怪、疾行抵都、業已愆期五六日、遂坐褫禄秩、歩吏以前事語他人、他人都不信、後加侯松雲院聞之曰、此事已見西土史籍、或曰、此所謂地陥者也、林瑜説、

松雲院惟称西土史籍、未確指何書、恨不得一叩其説、文化己巳春仲、支離子識、

瑞龍院之怪（4-2）

距米沢城六里高玉之地、有寺曰瑞龍院、寺中古（27オ）来禁不得塘壁（ヌル）、塘輒有火災、故屋壁代以木板、寺嘗経延焼、将改造、主僧曰、俗流之言、未必足信、命速塗之、落成之夕、有人在屋上大声曰、汝不守成禁、任意塗屋、今夕吾必焚燬之矣、僧聞之、遍命雛僧等巡察警防、夜過半、皆困憊就枕、俄而火発、闔寺蕩然、香坂維直説、

天下嫗（4-3）

嘗有一老嫗、浪遊四方、自云、嘗乳養 将軍者、衆信畏其言、所至飲饌供給、莫不精美、号天下媼、然（27ウ）嫗当浴時、甚悪人見、必遠人而後

敢浴、人頗以是疑之、一夕宿上州逆旅、浴于浴室、有黠児従壁隙窺覘、見嫗露尾撥湯以自娯適、児速糾衆、撃殺之、即尨然一大狸也、椎名維直説、

傘夫之怪（4-4）

金沢侯傘夫佚其名、遘疾死于第、道遠不便帰葬、衆荼毘之、函封其體（骸カ）、使人送致其家、入国之日、傘夫友見傘夫来、大喜、延入与之語、且命家人多設酒食、傘夫曰、吾未至家、不可緩也、友因紙裏糍団（28オ）数事贈之、傘夫拝謝出、友亦継而往傘夫家、賀帰郷、入其門則父母妻子相対歔欷矣、入其室、則已列木主、焚香薦時食矣、又見前有一紙裏物、類已所贈傘夫者、急析開視之、果糍団也、大驚、方悟向所見者鬼也、下村宗兵衛説、

火災有兆（4-5）

文化己巳正月元日之夕、火発青物坊、西南風急、煙焔甚熾、堺坊吹矢坊一時焦土、是日旦、吹矢坊準例、俳優数人、冠服扮三番叟、振金鈴起舞、所持（28ウ）鈴三顆、無故忽自墜地、衆驚怪、知必有変、及夕、果延焼、以其稍逆為之備、故衣物財貨不甚焚焼、新井駿説、

婦人為神所役（4-6）

信州民某娶妻、伉儷甚篤、生二子、長七歳、季五歳、一日失妻所在、遍捜室堂及庭、獲双庳屨于舎後、他無所見、某詢諸卜者、卜者曰、是不死、然非君力所能得、閲卜者四五人、如出一口、某不得已、不復捜求、居少之聘後婦、又生一子、失妻之後、経十三（29オ）年、其僚某氏入山、見一婦人髪四垂委地、顔色甚青、手爪甚長、絶不似人類、趨而従後至、某氏大懼走去、婦人追呼曰、妾素識君者、何見憎嫌之甚也、僚益懼、出死力疾走、卒為所及、謂某氏曰、妾即里民某妻某氏者、君都不記邪、某氏驚而視之尤、果然顔面口鼻、髣髴乎曩日所見、婦人又曰、妾為神所役使、不得少間、吾夫及吾子毎内閲于心、奈無縁相随、因問家人安否、某氏曰、挙俱無恙、婦人欣然有喜色、将別、謂某氏、君帰里、謹勿道見妾、某氏（29ウ）許諾、婦人沈思少之曰、妾雖固禁止、知君終必洩之、然洩亦無大害、所恨再会無日、請送君達山口、某氏恐怖甚、謂決不労相送、婦人固請、相伴而行、至所期之地、告別、指顧之際、婦人已不見矣、某氏帰具述所見、某大駭、爾後寂無音聞、椎名維直説、

鉄達磨入夢（4-7）

会津人上遠野右太八、多力好任侠、嘗求一隧子、亡可意者、一日過骨董店、見鉄鋳達磨、如一握拳大、大喜、速買以帰、命工穿其脇、以通糸条、工人持（30オ）以帰、淄川之南館邑、有寺曰弘真院、院主僧連数夜夢達磨来謂己、某将為右太八所穿脇、煩尊僧為某乞命、主僧未識右太八、明日強起往其家、告以所夢、右太八笑曰、某前者買得一鉄達磨、命工穿其脇、豈是歟、主僧請止其穿脇、右太八曰、命工已久、想已穿訖、若猶未也、敬従尊命、往問諸工家、則猶未穿、主僧遂乞鉄達磨、持而帰、安於寺以祀、樋口平三（光大）説、

一目人（4-8）（30ウ）

高松片山仲右衛門者、滑稽多知、性不畏怪、一日聚友人家、縦談入夜、友某語次謂仲右衛門曰、子雖性不畏怪、今已昏黒、決不能独詣白峯、蓋白峯有崇徳祠、山谷深奥多怪、人不能夜至故也、仲右衛門曰、此易易耳、言畢出去、黎明始帰、其友逆問、得無逢不若乎、仲右衛門曰、無、衆詰問弗已、仲右衛門沈思久之言曰、予甫至白峯、大疲、踞石吸煙、少之有蒙斗笠来謁祠者、予迎労其遠来之勤、再三言不応、予不勝憤、以手抬挙其笠、則面無鼻口、（31オ）止有一巨眼、瞠然睨人、予始釈然、謂曰、予不意子即不成人、屡問而不応、豈自慙忸其形之不如人而然歟、吾過矣、吾過矣、因釈去、所見止此、他無可怪者、衆服其胆、奥村彊説、

人魚（4-9）

讃州海上有島、名高見山、一日島中民、乗舟網于海、有物啼于網中曰、期期々々、民怪且恐、引網達岸、大会村民而挙網、得一魚、大三尺許、頚以上酷類人、頭禿無髪、顔色黧黒、耳目口鼻皆具、但不見（31ウ）眉、有牙利甚、蓋所謂人魚者也、衆打殺之、吉田畿親見、為予説、

味噌倉坊之怪（4-10）

金沢城下味噌倉坊、有一宅、地広袤財可五十弓、然其中多怪、居必羅患、士人某有胆気、聞之、故居此宅、嘗命賈人求一名刀、賈人持正宗刀来、索直裁十数金、某喜、速買之、已而吏撿公庫中物、正宗刀不在、大驚、遍索諸諸臣之家、不獲、因募于国中、獲窃刀者、賞者若干、某聞之駭懼、献向者所買刀、且(32オ)具陳其故、吏視之、果庫中所蔵也、遣人捕賈人、其家言賈人久在遠地未反、某終獲罪、林瑜説、

中村氏妾之鬼（4-11）

金沢士人中村右膳、夙喪其偶、置一妾、嘗祇役江都、留妾于家、右膳在江都第中舎、一日舎中小青衣、在聴事習書、見一婦人、靚粧襐飾、不通姓字、由外入、直趨室内、青衣知其非人、驚叫走入他室、右膳顧視、転瞬之間、頓失所在、大駭、心已知郷里必有死喪矣、後数十日、果書来報妾死矣、初妾見家(32ウ)有長嫡、以為今以右膳在故、家人挙陽浮善待我、右膳若死、彼必不以道遇我、因思欲大積財以資異日、多縫入円金于衽中、不令人知、妾已死、家人以其遺衣服凶穢不可用、召当舗主人売之、主人買而帰、蔵于衣厨、他日将売以図利、開衣厨取之、瞥見有手自衣中出、驚悸成疾、遂死、友田厚質説、

井中之毒（4-12）

讃州金毘羅門前阿波坊一賈人、命水工穿井、穿甚深而水不出、或曰、吾聞火能致水、井水不出者、(33オ)焚薪井底則水出、蓋試諸、便命一人、持火而入、不出、二人継入、亦不出、人無敢復入、因募于市、能入者酬金若干、有一人曰、予不能徒自取死、請以巨縄纏腰而後入、吾若動縄、則速引而出、衆許諾、如其言乃入、未達井半、遽動縄、衆引出、則気息奄奄将絶、急飲以良薬、少之甦、問其故云、吾始入井、覚気腥臭不可忍、愈入愈甚、因而昏眩、不記其他、於是下碇、鉤取三人屍、其後水出、殊清洌、加藤穀説、

窖中之毒（4-13）(33ウ)

龍土桜田坊煙舗有窖、主人嘗命僕三人、入窖取物、登時死、挙家大駭、募人取其屍、無敢入、有一人曰、吾聞以混堂側畔溝水頽面、能禦土毒、一人曰、吾以梅諸(醋カ)塗面、側土気不能傷、各行其所聞而入、遂取其屍出、亦不中毒、蓋窖中鎖閉日久、醸成毒悪之気、猝入、能殺人、此不可不知也、前田経説、

吉成氏之怪（4-14）

阿波州士人吉成百郎、有二子、長男季女、屡為物所誘出去、或五六日或十日、方始還家、百郎怒之、(34オ)輒見二子被縛、倒懸庭樹、号泣求救、而不見物形、百郎不得已、謝罪、二子始得脱、然二子謂物甚愛我、不以不道相遇、嘗謂物将啖我以酒肉、趨而赴之、家人止見其兀坐園圃中、移時入内、則曰、吾向者遊広厦華屋之中、飽噉八珍、甚快楽、家人大駭、竟不知其何物、一日百郎不勝憤、大声罵物、物自天花板上答曰、吾将焚汝家、汝怒奚益、百郎懼、尽聚会親戚友朋、以防守其家、俄而見大起亮隔上、撲而滅之、又起簷端、滅於東而熾於西、衆不知所(34ウ)為、家遂焼尽、国君命徒居于冨田、物来如故、因復築故宅而還住、一日物在屋上言曰、吾苦汝已至、亦可憐也、吾将他徒、自是怪始絶、四十宮淳行説、

木像言（4-15）

都下大御番某、狎北里一妓、情誼甚篤、臨当住摂府、解携之際、不堪悲恋、謂妓曰、雖再会匪遠、而一日三秋、情奚能堪、吾有一計、便命工、刻小木像、以肖妓形、毫釐不差、携以西、夜必擁以寝、一夕木像忽自発言、某驚悸得疾、遂死、若山静虎説、嗚呼惑(35オ)溺如此、怪異之生、自取之、木像寧能言乎哉、

吾嬬山大人（4-16）

奥羽界上吾嬬山之奥、有大人、蓋山気所生、長一丈五六尺、綴木葉以蔽身、不言不笑、時々入村人家、村人敬之如神、為設酒食、大人不飲啖、悉包裹以出、村中童竪従而戯侮之、亦不為害、神保甲作説、予謂此大人、不幸不遇時、使出於漢武之世、緱氏巨跡豈足道哉、西土之喧伝称仙者、意皆此類耳、又薩州人上原伯羽説、薩州深山中、時々有(35ウ)如婦人、被髪啼哭而行、蓋亦山気之所産也、

横槌（4-17）

羽州山中有横槌者、蓋蛇之属也、長五尺許、囲尺許、其形不可得而詳、但山渓間、有時見其行跡、洞然成路、巨石僵、松栢仆、合抱之巨木、無不齎粉矣、其猛威可想也、神保甲作説、

冤鬼作雨（4-18）

津軽侯出国赴都、必道秋田、渡玉川、一日侯経玉川、駅夫索銭甚切、呵禁之不止、侯怒甚、抵都、見秋（36オ）田侯、言駅夫無礼、侯不得已、下書国中、尽捕治玉川駅夫、磔且梟首者、凡三十余人、自後津軽侯過玉川、輒遇陰雨、小室弁蔵説、

鬼婦（4-19）

長門萩之下邑、有一士人、為子娶婦、伉儷甚篤、未幾、婦病亡、経数日、子憔悴瘦羸、皮骨相支、家人察其有異、問故、子曰、無之、詰問切至、終不吐実、家有一僕、謹愿有幹事之能、頗寵任用事、一夕従戸隙窺、見鬼婦自外来、入子舎、笑語歓洽如平生、向暁（36ウ）始去、明日僕復問子、々猶隠諱不敢言、僕怒曰、臣昨夜已従戸隙窺見、君掩蔽奚益、子不得已、乃曰、婦自始死之夕、無夜不至、僕曰、彼枯骸朽骨、君何愛焉、自今之後、痛絶勿近、子曰、吾能拒絶之、如彼自来何、僕低頭沈思久曰、僕有一計、其夕出至婦墓、屏気以待、頃之青火一団起于墳上、有一婦人、従之而出、状貌髣髴可弁、僕大声呵責曰、夫人鬼不同、幽明殊塗、汝已入九泉、猶貽禍于生人耶、鬼謝曰、妾多罪、惟是恩情之切、死而弗忘、幸寛妾、令（37オ）得一往見郎君叙別、則妾之短願畢矣、不敢復往、哀祈不已、僕曰、審爾、則一往可也、後勤勿復爾、鬼婦許諾、僕将還、覚有物倚背、軽如衣襆、蓋鬼婦也、抵家立于戸外、便覚鬼婦下背而入室、俄聞挙室喧鬧、僕怪之、入内、励声呵問、即聞衆呼曰、頑僕、汝何敢弑郎君、僕驚顧己、則右手持白刃、左手提子頭矣、僕遂坐誅、小田明説、〈下二条同〉

冤鬼為祟（4-20）

長府切通之地松田某宅、多怪、一夕主婦上厠、見（37ウ）浴室列錦衾繡被、燦爛鮮明、目所未経覩、主婦有胆気、不少怪懼、如厠而反、即見向之衾被、化為烈火、煙焔騰起、就見則無矣、又一夕、国老来訪、主人出応于門、対立而談、老小遺于墻下、窃窺爨室、見主人方執刀宰魚、手足拮据、老怪其退之速、窺門中、則主人竚立如故、老大驚、遽出去、初松田某之祖、有子病疱瘡、僕之子亦病、既而僕子善愈、已子独亡、松田不勝痛恨、悉殺僕妻子、由是為祟、

溺人之鬼（4-21）（38オ）

長門小田明、従家君遊、養父済川亦一儒者先、初清末侯好学、済川受知於侯、数往清末、済川嘗将葺屋、侯贈以茅、長府距清末里許、有海陸二道、侯命積茅于海岸、令済川発人取之、済川便使人乗船往取茅、更命僕半次郎、自陸路往了其事、半次郎到海岸積茅之所、舟未至、佇望移時、日已西没、細雨霏々、四無人声、半次郎不勝闃寂、向海上疾呼、遥有応者、三呼三応、半次郎喜謂船至、更呼数声、寂然不応、怪之、会雨勢益甚、不可露立、遂蔵于茅（38ウ）間、少之磯上有声、如崩頽石、大驚、出頭窺之、見一婦人、膚理雪白、蓬髪四垂、立于茅外、僕駭怪、抜刀斬之、倏然不見、便疾走帰家、至千棒堤上、復見向之婦人立于道上、僕驚怖、絶而復蘇、因右折、従驪馬駅帰、千棒地臨海、称為多怪、蓋溺人之鬼也、

長府風土三則（4-22）

蟹有一種、眉目完具、含怒之状可掬、称平家蟹、謂平家将卒死而所化、人所同知、壇浦之地極多、至今、安徳溢海之日、平家蟹会于壇浦者無数、歳以（39オ）為常、

長府鯉川之上有神后祠、々堂前有一石、裂為二、相伝神后克高勾麗、斬王頭、帰而埋于此、

長府楠村、有住吉神祠、俗至臘月初七日、神后誕太子之日、家々閉戸不許出外、是日往々聞群神飛翔之声、以上小田明説、

鼉（4-23）

本邦不産鼉、惟有鼉鼓二、一在天王寺、一在王城中、従未有目撃生鼉者、数年前、薩州属嶋人、網獲一（39ウ）鼉、不知其何物、相与烹而食之、逮婦女童稚咸飽、止余其頭、送致鹿児嶋、博詢諸人、方始知為鼉、州人馬

純明善画、問得其形状之詳而図之、予嘗一見、面目醜怪、殊可畏悪、惜当時不写取以蔵于家、文化庚午秋八月初八日記、

室中生花（4-24）

樋口光大説、距会津城三里許、一農氓家、一旦無故、室中戸壁尽生花、伝播遠近、咸来聚観、家沼重八鈴木瀬兵衛亦往観、二子光大友也、（40オ）

予友猪飼斗南、幼時習書、以一石為鎮紙、後投之箧中、棄而不省、経十余年、出而視之、石上生花、色白下垂、而石上処々墳起、類斑蘚、如将生花者、予親見、

蛇好穴（4-25）

仙台一士人家婢、臨河滌食器、露其陰、有蛇昂首、浮水而来、直向婢陰、婢惶急、以盆抗拒、蛇気方鋭、進触盆、頭折而死、千葉平格説、予嘗記、小説載蛇以尾淫婦人事、蓋蛇陰物、故好入穴、（40ウ）

麻生忍侯中邸、有士、欲悦其幼子、戯以鰻鱺向口、為欲生呑之状、失手入喉中、驚惶無策、或曰、酒可治、或曰、豆油可治、胥行其言而無験、遂為鰻鱺穿透其臓而死、前田経説、

鬼粟（4-26）

会津士人片桐善八家、在城下、一日掘庭、僅下鋤起土、即見下有流水、甚清且駛、少之有粟流至、取出、暴于日中、待其乾、以手揉之、化為灰塵、飄々飛去、善八大懼、速掩之、土屋朗説、（41オ）

蝦蟆吸気（4-27）

都下大根畑之地、有一賈人、在家、際晩臨庭、見一雀飛入堂下、如有物吸取之、久之不出、甚怪、低頭覗堂下、見有大蝦蟆、方張口、向外吸気、賈人亦為所吸気、自是冥然昏懶、如喪心之人、卒不差、新井華*平説、

海龍（4-28）

庚午夏五月三日、漁人於播州一谷海中、網獲一魚、大尺余、二角四足、鬚甚長、不可触、示諸人、莫能（41ウ）識、或曰、此所謂海龍者也、後蔵諸戸隠祠、々人殺之、嗣後一谷海上風波険悪、往来人甚患苦之、

鬼婦齧人（4-29）

立花坊賈人、狎妓、甚相愛、自是遇其妻無道、妻飲恨而死、賈人便納妓為妻、一夕妓出于戸外、号叫曰、鬼婦齧我、痛不可忍、家人趨出救之、妓仆于地、扶起入内、袒其背、有歯痕数十、少之気色復故、而歯痕爛壊、経数月猶未愈、時庚午九月十三日也、

八月之怪（4-30）（42オ）

己巳八月某日之夕、暴風驟雨、下谷有一小青衣、適市買酒、道上為物所捉、堕于本所晒油絹場而死、其体柔軟糜砕、若無骨、両地相距里余、不知何物能致之也、是夕、下谷逆旅紀伊国屋、有客数人留宿、主人偶忘鎖楼戸、主婦便持燭上楼、婢一人従之、会暴風驟至、燭滅、婢懼、急下楼、主婦独鎖戸、見有火過空、点点如星、連続而行、主婦数之至九、其後者尤大、主婦驚怖仆地、家人趨往救之、得甦、福井建蔵説、（42ウ）

天火（4-31）

肥州之地、屡有天火隕、望之似隕星、声如雷、久旱之後最多、若不速駆逐、必致火災、故天火隕、則土人大鳴鐘鼓以逐之、或敲箕撃木桶底、謂是二者、天火之所最畏、蓋南方炎熱、故然、山陽以東、絶不聞有此事也、

龍（4-32）

信州有一士人、投山中逆旅、晨起視庭、有一石生霧、濛々騰起、士人以十金買之、主人素貧、更多索（43オ）金、士人不得已、棄去、已而主人以為奇貨可居、以水滌濯、去其苔蘚、以手摩莎令光沢、滌水時、有一小白虫、自石罅流出、自是不復生霧、月余、士人復来問之、主人具対以故、且勧之買、士人曰、吾曩日橐中空乏不能買、甚以為恨、今之来、将如子言与価以買之、然吾所以欲買者、以其能生霧也、生霧者非他、龍棲其中故也、子前日所濯去之虫、即龍也、龍已不存、頑然之石、真不中一銭、買之何為、遂辞去、主人悵然而已、山田維則説、（43ウ）

韓児還冤（4-33）

豊臣氏之征韓也、佐賀侯之先日峰公、屡有功、其老多久大夫実従、多久臣副島某、生擒韓人児以帰、児性聡穎伶俐、嗜学能文、博綜衆技、某極鐘愛之、養以為己子、児稍長大、恃才驕肆、好凌忽人、其寝悪而疎之、

児亦自知失愛於父、居常怏々、其慮其桀驁弗已、終必為已累、夜乗其甘寝、以被纏縈其身、刺以刀而殺之、由是為祟、連三世早死、曽孫嗣家、一日日中、鬼自外至、排戸而入、視之、宛然韓児（44オ）也、蓬髪被背、面目青黧、身猶衣見殺時被、血淫々滴地、謂主人曰、吾即汝祖所殺韓児也、吾冤枉罔極、已殺汝父祖三人、然惟殺人而無明々之徴、恐人或不信、以為狐狸百鬼之為、不足以白我心於天下、明日吾将再来、汝当揀取一人以為尸、吾将憑其身以陳中心不平之憤、言卒、翩然而去、挙家大駭懼、恐忤其意、或重致禍祟、詰朝遍会族姻、取采邑民家子最惷愚顓蒙者一人、以為尸、衆環列嚮之、俄爾童子眉軒皆裂、志気激昂、具説昔年之（44ウ）冤、雄弁如流、全非前日田家子、少選童子憤歎戟手曰、吾積怨深怒、非口語所能悉、其速具筆研、家人恐懼惟命、童子握筆疾書、滔々数百千言、投以示衆、衆取而観之、筆勢飛動、語意悲壮、皆訟怨陳冤之言、大意以為吾眇然三韓之累臣、面縛来此、固無心草間求活、且人孰不死、吾豈畏一死者邪、所可恨者、一養我為子、又詭計誘而殺之、其鷙忍不仁、曽犬彘之不若、果欲殺我、何不予我以一剣、使得自裁於前、不肯為磊々落々大丈夫之事、而（45オ）乃為此反覆陰険機穽変詐之謀、罪信不容乎死、吾得訴於帝、既斃汝家三世、未足快吾忿、某年某月某日某時、吾必戮死主人公、使副島之後永無一塊余肉、読方半、而童子惷愚如故、都不記前事、家人怖懼、計無所出、至期、主人果死、其子其孫、皆不得其寿、因養螟蛉子以承家、令副島氏猶在、而某之後絶久矣、初童子所訟冤書、久蔵副島家、邑中父老猶或及見之、中間遺火被焚、多久人草場韡説、辛未三月上巳後二日記、〈此事甚古、而不刪去、亦第三巻（45ウ）録杜若怪之意也、〉

猫王（4-34）

距仙台城三十里所、有寺、名正法寺、々有大鼠、常在重楼上、人不敢登、屡嗾猫拿之、莫能獲、反為所咬死者比々、故主僧亦被噉而死、主僧継来住者、憂懼甚、鋭意欲殺之、遍求於人、獲一猫、形態不凡、一夜夢猫謂僧曰、鼠甚大、非吾所能独制、当往京師求友以籍助、明日果失猫所在、経十余日、僧復夢猫曰、吾友明日必至、当以是日誅鼠、猶恐彼（46オ）或冒死逃逸、幸発人丁、以助声勢、明旦主僧大会近村人、提挺持刃、伏於楼下、俄而聞楼上追逐搏撃之声甚喧、少之寂然、登楼視之、鼠死、其大如狗、京猫亦斃于其傍、寺猫困憊不能起、飼以薬、纔而得活、此数十年前事也、迄今、京猫死之日、衆猫尽会寺中、其声満山、所死者蓋猫王云、千葉平格説、

煜按清査慎行人海記曰、仁和郎瑛所著名続已編、内一段云、福建布政朱彰、景泰初謫陝西荘浪駅丞、有西番使臣入貢一猫、道経于駅、彰（46ウ）館之、問猫有何異、使臣云、向夕請試之以猫盛罩于鉄籠、納空屋中、明日起視、有数千鼠、伏籠外尽死、蓋猫王也、使臣又曰、此猫所在、雖数里外鼠、皆来伏、其言如此、鈞是猫王也、今正法寺猫王、其技似迥不及西番所貢、丙子六月念三、侗庵蠖屈子識、

竹島鰒芦異常（4-35）

竹島海上一小島也、在雲州西北、隠岐距雲州十八里、竹島距隠岐亦如之、島宜漁、鰒最多、旧無（47オ）居人、故地無所属、百余年前、雲州松江有一商人、佚其名姓、夫妻歳一往取鰒、稠載而帰、久擅其利、嗣後　公命以島賜朝鮮、商人不知而復往、朝鮮人方臨岸、厳列弓弩以待、乃還、島又産芦、極大、可以作挿花瓶、今邦人不敢往竹島、而都下間有貨竹島芦者、詢其故云、時々流至隠岐、海上人取以射利也、雲州海野彬説如此、予友筑後溝上是平曰、州有一医生、獲竹島鰒殻、甚珍之、博求人題詠、其形極円、大異中土所産、吾嘗親見云、〈竹島大芦、与第一巻（47ウ）所載沼海蕉葦大如竹者相類可参観〉（48オ）

（たかはし・あきひこ　近世国文学）

（平成十一年十月二十九日受理）